第２次
三好市観光基本計画

2020-2024

2020（令和 2）年 3 月

三好市

目次

はじめに..... 1P
第 1 章　三好市の概要
1-1 計画策定の経緯..... 2P
1-2 三好市の概要(自然地理/産業/人口動態)..... 3P
1-3 三好市の観光への取り組みの歴史..... 6P
1-4.三好市の地域資源一覧..... 11P
1-5.三好市の産業構造..... 22P
第 2 章　観光市場の動向
2-1.世界の観光市場..... 25P
2-2.日本の観光市場..... 27P
2-3.四国の観光市場..... 30P
2-4.徳島県の観光市場..... 33P
2-5.三好市の観光客動向(アンケート調査)..... 35P
第 3 章　三好市における観光政策の課題
3-1 三好市の観光政策の課題..... 44P
3-2 三好市観光の現状分析(SWOT 分析) 48P
第 4 章　三好市観光振興実現に向けたグランドデザイン
4-1 「三好市観光政策のグランドデザイン(三好市まるごと観光)」..... 51P
4-2 KPI 達成のための戦略..... 56P
4-3 計画期間について..... 68P
結びの言葉..... 69P

はじめに

本市は、四国のほぼ中央に位置し、四国で最も広い面積を有する市であり、豊かな自然景観と永い人々の営みによって育まれた固有の歴史文化があります。

日本三大秘境の一つである「祖谷」をはじめ、国の名勝・天然記念物「大歩危・小歩危」、ミシュラングリーンガイドに選ばれた「祖谷渓」、ラフティングとウェイクボード２つの世界大会が開催された吉野川など、世界レベルの観光スポットやアクティビティが楽しめます。

また、米ニューヨーク拠点の大手旅行雑誌「トラベル＋レジャー」で「2018 年に訪れるべき 50 の旅行地」に日本では唯一「祖谷渓」が選ばれ、さらには世界一位のシェアを誇る旅行ガイドブック「ロンリープラネット」、世界的に著名な米国 CNN の旅行メディア「CNN Travel」等でも本市が紹介されたことにより、近年、世界水準の観光地として国内外より大きな注目を集めています。

一方、本市においては 2019 年には高齢化率が 43%を超えるとともに、全行政区の半数近くが限界集落となっており、本市における「人口減少」の抑制や「少子化」への対応は急務であり、国全体の大きな課題である人口減少社会に向けて、各種取り組みを進めているところです。

このような状況を踏まえ、本計画では、三好市の人口減少によって引き起こされる様々な地域課題を解決に導き、地域活性化を実現することを目的として、観光政策を「今後の三好市の外貨獲得の基幹産業であり、あらゆる政策に横串を刺すリーディング産業」に位置付け、「住んでよし訪れてよしの観光地域づくり」の実現に向けて、「第 2 次三好市観光基本計画」を策定しました。

この計画において定義する「三好市観光政策のグランドデザイン（三好市まるごと観光）」を実現するため、官民が一体となった観光振興に取り組んでまいります。

結びに、本計画の策定にあたりましてご尽力を頂きました三好市観光基本計画策定委員の皆様をはじめ、ご協力いただきました皆様に深く感謝を申し上げご挨拶といたします。

2020（令和 2）年 3 月

三好市長　黒川征一

第1章　三好市の概要

1-1 本計画策定の経緯

・計画策定の経緯

三好市では、これまでにもインバウンド観光客[1]の誘客をはじめとする観光政策に注力してきたが、より一層効果の高い観光政策を実施していくためには、今後の日本や四国を取り巻く外部環境の変化や、人口減少の進む本市における内部要因を踏まえ、交流人口の増加と地域経済活性化を結びつけるロジックを入念に検討する必要がある。特に様々な資源制約(ヒト・モノ・カネ)が強まる三好市においては、入念に検討された戦略的な観光政策が必要不可欠である。この様な三好市の戦略的な観光政策の指針となる行政計画を策定し、具体的な将来像や目標の下、市民や観光関係団体、行政などが一丸となって観光振興に取り組む必要がある。こうした背景を踏まえ、市内に存在する観光資源の魅力や課題、さらに変化していく外部環境を分析し、本市の観光における今後の方向性や目指すべき将来像、関係する主体がそれぞれ担うべき役割や目標などを定めた「第2次三好市観光基本計画」を策定した。

・計画の期間

本計画の計画期間は、2020年度から2024年度までの5年間とする。なお、観光市場を取り巻く環境は刻一刻と変化していくことから、5年間の各年度末に計画の進捗状況等を確認しつつ、本計画の内容を適宜見直していくものとする。

・計画の位置付け

本市では、2018（平成30年)に策定し、まちづくりの方向性を定めた「第2次三好市総合計画」に掲げる将来像「自然が生き活き、人が輝く交流の郷三好市～あふれる笑顔と未来のために～」の実現に向け、その施策である「地域性を活かし魅力ある煌めくまち-観光の振興-」や、 2016（平成28）年に策定した「三好市まち・ひと・しごと創生総合戦略-2017（平成29）年改定-」の「訪れてよし・触れてよし・住んでよし」笑顔創生・三好の将来像の実現に向け、本市が有する観光資源の魅力や課題を洗い出し、今後5年間における観光振興の方向性や基本戦略、さらには、その実現に向けた具体的施策を定める計画として策定する。

[1] 訪日外国人観光客を意味している。

1-2 三好市の概要(自然地理/産業/人口動態)以下、三好市「第2次三好市総合計画」より引用。

・自然的特性

本市は、徳島県の西端にあり、西は愛媛県、南は高知県、北は香川県に接して四国のほぼ中央に位置している。面積は 721.42 ㎢ で、市町村では四国一広い面積を有し、徳島県の 17.4%を占めている。市域の大部分は丘陵並びに山地となっており、可住地は吉野川の沿川とその支流の谷合に点在している。その面積は 13%と低く、ほとんどが急峻な山地で形成される。

また、四国三郎の異名を持つ大河吉野川が中央を通り、大歩危峡や黒沢湿原、紅葉の名所の竜ヶ岳、四国第二の高峰である剣山といった豊かな自然・名勝を有し、豊かな自然が織りなす四季折々の独特な風景は、日本でも屈指の美しい景観を形成している。

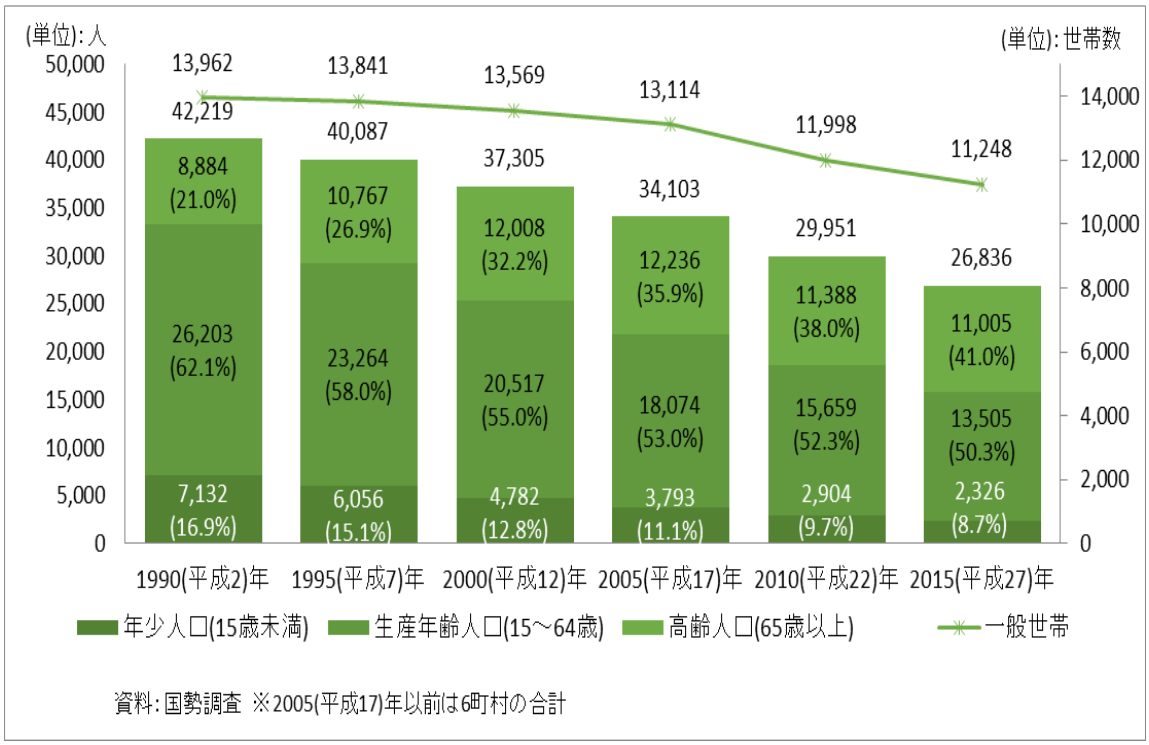
・交通上の特性

本市における鉄道の状況は、東西方向に JR 徳島本線が国道 192 号と並行し、南北方向に JR 土讃線が国道 32 号と並行して走っており、池田地域にある JR 阿波池田駅が 2 路線の重要な乗換駅となっている。また、主要な幹線道路としては、東西に連絡する国道 192 号、主要地方道鳴門池田線、徳島自動車道、南北を連絡する国道 32 号があり、古くから四国中央地域の交通の要衝となっている。

また、2007 年度（平成 19 年度）より工事が進められている国道 32 号猪ノ鼻道路は、全長 8.4 kmの新設道路で、2020 年度（令和 2 年度）の開通を目指しており、全体の 80%がトンネルとなっている。このうち新猪ノ鼻トンネルは、香川県と徳島県を結ぶ全長 4187m。当該区間の急勾配・急カーブが解消される事から、異常気象や積雪時の通行、救急搬送ルートの確保など、住民の安全で安心できる生活の実現が期待されている。開通に向けては、交通アクセスの改善効果を地域経済の活性化と観光振興へと昇華させるべく、その検討が求められている。

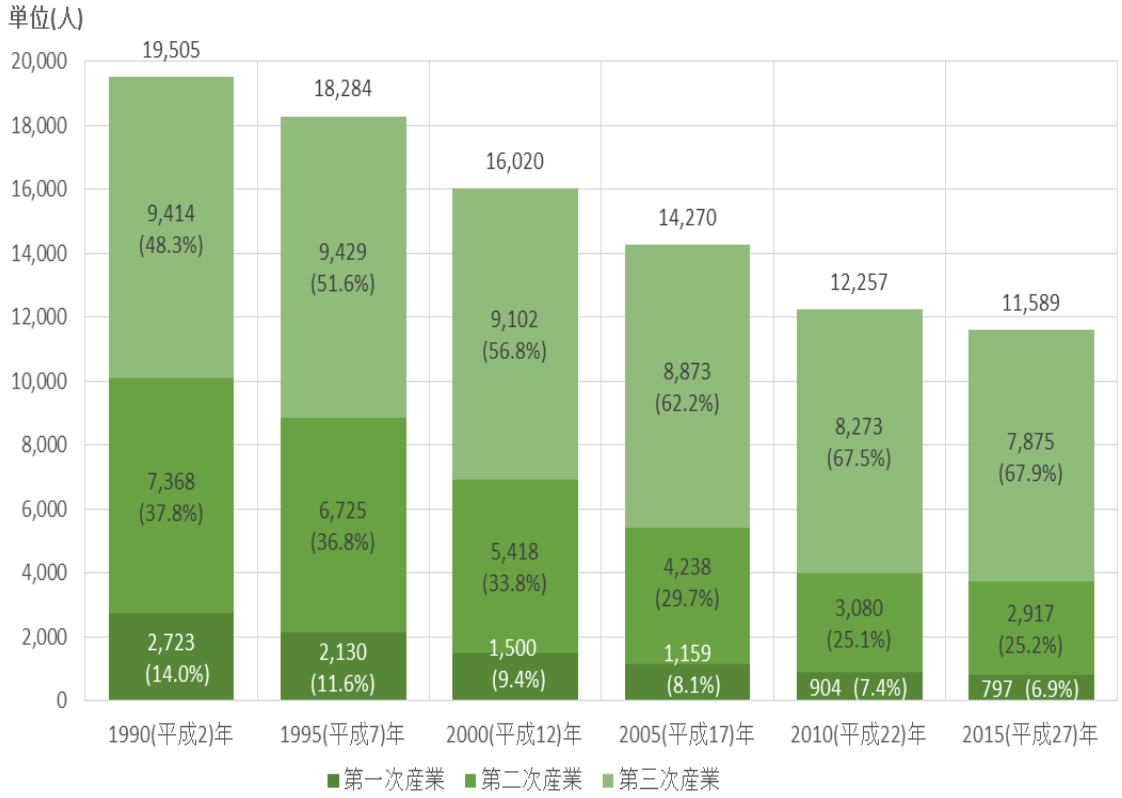
・人口動態、及び産業人口

本市の総人口は、2006（平成18）年の市発足以降も減少を続け、国勢調査結果によると2005（平成17）年の34,103人から2015（平成27）年の26,836人と大幅に減少しており、人口減少、少子高齢化が進んでいる。



また、就業者数は、市の人口動態とともに減少傾向にあり、国勢調査結果によると、国内においては就職氷河期といわれている 1995（平成 7）年の 18,284 人から 2005（平成 17）年の 14,270 人の 10 年間が大幅に減少している。

産業別の割合をみると、これまでの市の基幹産業である第 1 次産業は、人口減少とともに、農林業の担手不足等により衰退傾向にあり、1990（平成 2）年の就業者数（14%）に対して、2015（平成 27）年の就業者数は 6.9%と半分になっている。一方で、第 3 次産業の構成割合は、1990（平成 2）年の割合は 48.3%に対して、2015（平成 27）年は、67.9%と伸びてきている。



資料：国勢調査 ※2005(平成17)年以前は6町村の合計

1-3 三好市の観光への取り組みの歴史

・三好市の観光の概要

本市は、剣山山系を源とする祖谷川の源流から吉野川中上流域までの広域なエリアで形成されており、自然公園として北部と中部の山脈沿いに「剣山国定公園」並びに香川県境一帯に「箸蔵県立自然公園」、高知県境に「野鹿池山自然環境保全地域」が徳島県により指定されている。剣山国定公園には、渓谷の美しい急流で有名な大歩危・小歩危渓谷をはじめ、祖谷渓谷、剣山、三嶺などの観光拠点が含まれており、近年では、本市を訪れる外国人観光客も増加している。祖谷のかずら橋、大歩危の遊覧船、うだつのまち並み、東祖谷落合重要伝統的建造物群保存地区、剣山には、春から秋にかけての観光シーズンを中心に多くの観光客が訪れている。また、市街地中心部で開催される「いけだ阿波おどり」をはじめとする 伝統的なお祭りが充実し、井川地域南部の腕山スキー場、大歩危・小歩危渓谷のラフティング、剣山登山、急峻な山岳コースの中で行われるサイクリングイベント「ツール・ド・にし阿波」の開催など、観光・スポーツ体験のまちとしてもにぎわっている。また、ウォータースポーツのまちづくりを目指すなか、2017(平成 29)年には日本初となる「ラフティング世界選手権 2017」が開催され、2018(平成 30)年には「ウェイクボード世界選手権大会 2018」が開催された。

・三好市(及び周辺地域)の観光への取り組みの歴史

三好市を含む「にし阿波～剣山・吉野川観光圏」は観光地としての歴史が古い地域があり、寛政年間（18 世紀末）のかずら橋などの周遊記が残されている。1936（昭和 11）年発行の名所案内には、にし阿波～剣山・吉野川観光圏協議会が現在発行しているガイドマップに紹介されている名所施設（土々呂の滝、土釜、池田町、腕山のスキー場、大歩危、祖谷、祖谷渓）が既に記載されている。

また、1941（昭和 16）年発行の観光ガイドに、剣山、土釜、鳴滝、池田町、祖谷渓、大歩危・小歩危の記載がある。池田町には 3 軒の旅館が紹介されている。さらに、一宇に 3 軒、京上に 3 軒などの簡易旅館、大歩危・小歩危に 5 軒の旅館が紹介されている。

前述の通り、国内の他地域と同様に、同地域は人口減少・高齢化が課題となっている。1890（明治 23）年の人口は、西祖谷山村 4,652 人、東祖谷山村 4,520 人であり、その後 1953（昭和 28）年に西祖谷山村 6,606 人、1956（昭和 31）年に東祖谷山村 8,974 人まで増加していたが、この頃をピークに減少を続けている。

同地域の主要観光地の 1 つである「祖谷温泉」は、平家一族が祖谷山に入り温泉を見つけたという伝説はあるものの、その歴史は 50 年程度と比較的新しい。大正期以降トンネル掘削中に温泉が見つかり、温泉開発を過去に数回試みたが、いずれも地盤不良や資金難で頓挫してきた経緯がある。

1962（昭和 37）年、池田町・西祖谷山村が共同試掘願を県知事に提出、1965（昭和 40）年には温泉の掘削に成功し、温泉ホテル建設の計画が上がったものの実現には至らなかった。その後、無料の露天風呂をつくり解放したところ、県道から崖下に標高差 170m、長さ 254mの階段を降りる必要があるにもかかわらず、利用者は年約 2 万人にも達した。こうした経緯から開発計画が持ち上がり、祖谷渓温泉観光株式会社が 1972（昭和 47）年 10 月に「ホテル祖谷温泉」をオープンさせた。

祖谷渓の観光は、道路の開通とともに発展してきた。1920（大正 9）年に旧池田町と祖谷を結ぶ「祖谷街道」が開通し、池田から流入する観光客が増加した。その後の道路整備の進捗に伴い、1966（昭和 41）年頃には「かずら橋」には年間約 2 万人が訪れるようになった。1974（昭和 49）年に、祖谷渓有料道路が開通し、観光客が急増。1982（昭和 57）年には、四国交通がボンネットバスによる周遊ツアーを開始し、人気を博した。また、大鳴門橋（1985（昭和 60）年）、瀬戸大橋（1988（昭和 63）年）の開通により 31 万 5000 人と観光客が急増しているが、明石海峡大橋（1998（平成 10）年）の開通年の 39 万 8 千人をピークに、翌年には 28 万 3 千人と減少に転じている。

こうした経緯の中、大歩危・祖谷地区周辺の 5 つの温泉宿が「大歩危・祖谷いってみる会」を 2000（平成 12）年に立ち上げ、特にインバウンド観光客誘客に向けての取り組みがスタートした。こうした取り組みは現在のインバウンド観光客誘客に繋がっている。

また、当該地域の観光振興において「大歩危・祖谷いってみる会」と同様に重要な役割を果たしているDMO「そらの郷」について、その組織遍歴を概観する。

2006（平成18）年、当該地域は2市2町に統合され、また徳島県西部総合県民局の組織により観光担当が新設された。2007（平成19）年2月には、地域において主に農家民泊（教育旅行）の受け入れを行なっていた任意団体が「そらの郷山里物語協議会」として設立した。同協議会の活動は、1995（平成7）年に農業高校修学旅行生の農家民泊受け入れまで遡る。同会は、1998（平成10）年から旧山城町「農山村生活体験交流事業」を引き継ぎ修学旅行生の農泊の受け入れを行なっていた。

2008（平成20）年に国土交通省の外局として観光庁が発足し、国を挙げての観光誘客促進が行われることになった。観光地が広域的に連携した「観光圏」を整備することで、国内外からの観光客が2泊3日以上の滞在型観光ができるエリアの整備を促進するための「観光圏整備法（観光圏の整備による観光旅客の来訪及び滞在の促進に関する法律）」が2008（平成20）年5月に成立した。同法及び同法に基づく基本方針のもと、2008（平成20）年10月に「にし阿波観光圏」は四国で初めての認定を受けた。

2012（平成24）年には、任意団体「そらの郷山里物語協議会」が「一般社団法人そらの郷」として法人化される。「一般社団法人そらの郷」は、「ほんもの田舎体験」をキャッチフレーズに着地型旅行商品の開発やプロモーションを行い、教育旅行の受け入れ窓口となっている。この教育旅行は、農家に滞在し農作業を手伝い、地域の食材での料理を体験する農家の生活体験が特徴である。2013（平成25）年には、「にし阿波～剣山・吉野川観光圏」が新観光圏制度においても認定を受ける。実施主体は「一般社団法人そらの郷」で、行政が事務局を務めている。昔ながらの文化を想像させる「千年のかくれんぼ」をキャッチフレーズとしており、インバウンド観光客の誘致にも積極的に取り組んでいる。

2017（平成29）年11月に「そらの郷」は日本版DMO（後述）の第1弾として地域連携DMOに登録された(地域連携DMO)。日本版DMOとは、観光地域づくりの舵取り役を担う法人を指す。

現在のDMOとしての「そらの郷」は、上記の経緯の様に、「そらの郷山里物語協議会」、「一般社団法人そらの郷」、「一般社団法人そらの郷」のDMO認定、という経緯により形成されたのである。元々の「そらの郷山里物語協議会」は三好市が設立に関与したが、観光圏事業採択後は、にし阿波観光圏内における「観光地域づくりプラットフォーム」として旅行商品の企画・開発・販売や、外国人観光客誘客、体験型教育旅行受入窓口等を行なっている。これにより、三好市で行われていた農家民泊の活動が「にし阿波」全体に広がることとなった(現在は2市2町が予算を負担し活動している)。同組織が年間に受け入れている4,000泊の9割以上は農家民泊で、2016（平成28）年には、27校3,850人の利用があった。また農林水産省「食と農の景勝地」の実行組織の役割も担っている。

上述のとおり、「大歩危・祖谷いってみる会」や行政、DMO[2]のこれまでの取り組み経緯と関係を把握した上で、同地域でのインバウンド観光客への取り組みと効果を整理することとしたい。

まず、「大歩危・祖谷いってみる会」は、2007（平成19）年頃からインバウンド観光客の取り込みに向けた取り組みを開始している。きっかけは、ロンリープラネットに当該地が掲載され、当該地における外国人バックパッカーが増加したことである。こうした増加を背景に、今後日本全国における人口減少は確実であり、宿泊業は、廃業か業種転換かインバウンド展開しか選択肢はないと考えたとしている。そこで次なるマーケットとしてインバウド市場を選択した。この背景には観光立国という国の政策方針もあった。

同会は、大歩危・小歩危はラフティングが盛んなため、同じくラフティングが盛んなオーストラリアにマーケティングを行った。当時、この取り組みはダイレクトに大きな効果を得られるものではなかったが、現在の国を挙げた欧米豪のインバウンド観光客の取り込みに向けた活動と相まって、現在の新たな層の取り込みに活かされてきている。

並行して、日本と文化が似ている香港へマーケティングを展開した。高層ビルが立ち並ぶ都会の香港市民にとって当該地域は非日常であり、日本と同じ左側通行でレンタカーでの移動に抵抗が少ないこともあり、香港での地道なマーケティングは成功に繋がった。営業には三好市・徳島県西部総合県民局といった行政メンバーも同行して行った。その他、旅行代理店やメディアを対象とした視察旅行（FAM ツアー）の企画や、東京や海外でのセミナー開催や商談会参加を継続して行っている。

さらに、2015（平成27）年6月には、観光庁が認定する「広域観光周遊ルート」のうち、同エリアが含まれた3ルート「美の伝説」「せとうち・海の道」「スピリチュアルな島 ～四国遍路～」が認定された。「広域観光周遊ルート」とは、訪日外国人旅行者の地方誘客に資するテーマ・ストーリーを持ったルートの形成を促進するため、具体的なモデルコースを中心に、地域の観光資源を活かした滞在コンテンツの充実、ターゲット市場へのプロモーション等、外国人旅行者の周遊促進の取り組みを支援するもの。2015（平成27）年に7ルート、2016（平成28）年に4ルートが認定されている。

こうした取り組みはやがて、観光圏事業として地域一体で取り組む中核事業となっていった。観光圏事業の補助金も活用しながら、地道な営業活動を続けた結果、「大歩危・祖谷いってみる会」5宿泊施設の年間外国人宿泊客数は、2007（平成19）年の546人から2017（平成29）年は18,847人と10年間で34倍に増加した。また2017（平成29）年の外国人宿泊者数を国籍別に見ると最も多い国が「香港(53%)」であり、「台湾(11%)」「中国(6%)」「アメリカ(5%)」と続く。対前年比の伸長率で見ると「韓国(311%)」「フランス(135%)」が高い。

[2] 観光振興によって地域活性化を目指す法人「Destination Management Organization」の略。

また同地域は、その文化の特殊性や観光への積極的な取り組みにより、複数の省庁等から様々な認定を受けている。2005（平成 17）年 12 月、三好市東祖谷の落合集落は、山村集落として国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

また、2016（平成 28）年 11 月、農林水産省「食と農の景勝地」の認定地域として全国５地域のうちの１つに選定される。「食と農の景勝地」とは、訪日外国人旅行者の観光需要を国産農林水産物・食品の需要拡大及び農山漁村の所得の向上に繋げていくことを目的に、地域の食と、それを生み出す農林水産業を核として訪日外国人を中心とした観光客の誘致を図る取組みを認定するもの。

さらに、2017（平成 29）年 3 月に日本農業遺産、2018 年 3 月には世界農業遺産にも認定されている。2017（平成 29）年 9 月、『秘境山間地のインバウンドへの取組み』で第 3 回ジャパン・ツーリズム・アワードの国内・訪日領域の領域優秀賞地域部門を受賞している。またアメリカの３大旅行雑誌である Travel & Leasure 社の選定する The 50 Best Places to Travel in 2018(世界で行くべき旅行地)に、「IyaValley(祖谷渓)」が日本で唯一選出された(下記図参照)。

The 50 Best Places to Travel in 2018

BY **TRAVEL + LEISURE** AND **TRAVEL + LEISURE STAFF** | DECEMBER 05, 2017

View All

TRAVEL+ LEISURE

50 of 52

Iya Valley, Japan

PHOTO: CULTURALEYES-AUSGS2/ALAMY

Known as the Tibet of Japan, the remote Iya Valley is tucked away in the mountainous interior of Shikoku, the least visited of the country's four main islands. Tourism to the region took a leap forward when it hosted the World Rafting Championship in 2017 — putting its turquoise Class Four rapids firmly on the adventure-travel map. New ziplines and hiking trails are sprouting up in the canyons, while upgrades have been made to accommodations in the area's traditional thatched-roof farmhouses, or *minkas*. Chiiori House is the most luxurious; the property also maintains an excellent portfolio of more affordable options. —*Adam Harney Graham*

参照：https://www.travelandleisure.com/trip-ideas/best-places-to-travel-in-2018?slide=622638#62263

1-4 三好市の地域資源一覧

自然資源

吉野川	幹川流路延長194km、流域面積3,750km²の河川。利根川、筑後川と共に日本三大暴れ川の一つとして数えられる。街道と並行している吉野川は、藩政時代より水運（河川交通）が盛んであり、鉄道の開通に至るまでは吉野川の川筋には、池田町の「はまの港」をはじめ多くの港町が形成され、舟が人や物資を運び、交通の主役として活躍した。現在でも世界屈指の豊かな水量と世界レベルの急流、激流ポイントがあり、来る人を世界最高レベルのダウンリバーに導いてくれることから世界のパドラーが目指す世界ブランドの「Yoshino River」と言われている。
祖谷渓谷	吉野川支流の祖谷川に見られ、全長約 10km にも及ぶ V 字型に深く切り込んだ渓谷である。祖谷街道から高いところは 100m以上の高低差があり、手つかずの自然が多く残さていることで秋には谷底から峰まで全山紅葉し眺められるなど、四季折々の変化が楽しめる。また途中、ひの字や小便岩といわれる大断崖からは、渓谷の急峻な地形が見られる。
剣山	標高1,955m、石鎚山に次ぐ西日本第2の高峰。登山口から登山道の中央付近まではリフトが設置されており、日本百名山の中でも非常に登りやすい山とされていることから、シーズンを通じて登山を楽しむ人々でにぎわっている。原始林が姿を残し、高山植物の群生地もあって四季折々の変化が楽しめるほか、古くから山岳信仰の霊峰としても知られ周辺には1800m級の山々が並ぶ。
大歩危・小歩危	「大歩危小歩危（おおぼけこぼけ）」は、四国山脈を横切る吉野川の激流によって創られた約８ｋｍにわたる渓谷で、本来は地名というより「ハキ・ハケ・カケ・ガケ」などと同様に、切り立った崖を表す自然地形名称「ホケ」が地名化したものである。 1891（明治 24）年から 1892（明治 25）年にかけて開通した三好新道（現国道 32 号線）によって、景勝地として広く認知されるようになり、2014（平成 26）年 3 月 18 日に、国指定の天然記念物に指定され、2015（平成 27）年 10 月 7 日には国指定名勝となっている。また、2018（平成 30）年 2 月 13 日には小歩危が追加されて、「大歩危小歩危」で国の名勝に指定されている。

塩塚高原	徳島県・愛媛県にまたがっている標高 1,043mの塩塚峰に広がる高原である。高原は多く生えている茅（ススキ）は、古くから畑等の肥料として使用されており、良質な肥料を作るため現在でも野焼きが行われている。高原から晴天時には、遠く瀬戸内海や山陽道が望め、季節の変わり目の早朝には雲海も見られる。
黒沢湿原	西日本屈指の湿原地帯。ミズゴケ、サギソウなどの水生植物が見ごろとなる 6 月から 10 月にかけ湿原散策に訪れる人が多い。整備された木道で、のんびり自然を堪能できる。なお、近くには松尾川温泉（源泉かけ流しアルカリ性単純硫黄泉）があり、湿原を散策した後には、のんびりゆったりと癒しの時間を過ごすことができる。
池田湖（池田ダム）	池田ダムは徳島県三好市池田町西山地先、吉野川本川中流部に建設されたダムである。四国のみずべ八十八カ所に選定されている。約 300 万年前は香川県の方角に流れていた吉野川は、約 200 万年前からの中央構造線の活動により、讃岐山脈が隆起する大地のスポックメイキングな出来事により、池田町で川の流れが北から東に大きく変わった。その出来事によりイケダ湖周辺は、風の影響の受けにくい鏡のような水面が誕生した。フラットウォーターのイケダ湖では、フラットラフティング、サップ、ウェイクボード、バナナボートなどのアクティビティが楽しめる。2018（平成 30）年 8 月にはウェイクボード世界選手権大会が行われた。
下影の棚田	棚田とは、山の斜面や谷間の傾斜地に階段状に作られた水田のことをいい、山間部の傾斜地形に適応した農場として古くから農山村に見られる。井川町にある「下影の棚田」は 1999（平成 11）年に選定された「日本棚田百選」にも選ばれ、田植え時期には多くのカメラマンが全国から訪れる。
ご来迎の滝	多美山の山頂近くにあるこの滝は、全部で四段に分かれた滝で、上から一段目、二段目、そして参道を挟んで下に三段目、四段目の滝がある。落差 15m、幅 7m。静寂の中に響く滝の音は清涼感に満ちた趣がある。また、毎年寒さの厳しい日が続くと滝は凍り、見事なつららを見ることができる。
龍頭の滝 金剛の滝	＜ 龍頭の滝 ＞三野町の滝谷川上流にある滝。落差 20mで滝壷に落ち込んでいる水はそのまま飲料水として取水されているほど清水。 ＜ 金剛の滝 ＞龍頭の滝から、さらに 300m ほど登り詰めたところにある滝。落差 40m で、原生林に囲まれた滝は、別称「紅葉の滝」とも呼ばれている。その昔この滝壷で弘法大師が修行したとも伝えられている。

中央構造線	中央構造線は、日本最大級の断層である。構造線に沿って南北に分布する岩石は、北側（内帯側）は領家変成帯（中生代ジュラ紀の付加体が同白亜紀に高温低圧型変成を受けたもの）、南側（外帯側）は三波川変成帯（白亜紀に低温高圧型変成を受けたもの）である。三好市池田町をちょうど横切るように中央構造線が走っている。
竜ヶ岳	松尾川の中流部で、腕山の南西の斜面にある竜ケ岳は約 2km にわたって数百メートルの断崖をつくっている。見頃は紅葉時であるが、落日に映える錦絵は懸崖を一層引き立てる。
雲海	雲海とは、山や航空機など高度の高い位置から見下ろしたとき、雲を海に例える表現。山で見られる雲海は、山間部などでの放射冷却によって霧、層雲が広域に発生する自然現象による。山城・大歩危・祖谷地区の集落では早朝高い確率で見ることができ、各地に雲海テラスも存在している。
ニホンカモシカ	ニホンカモシカは、偶蹄目（鯨偶蹄目とする説もあり）ウシ科カモシカ属に分類される偶蹄類。単にカモシカとも呼ばれる。カモシカという名前に惑わされやすいがウシ科である。特別天然記念物にも指定されている珍しい動物だが、にし阿波の山間部では比較的よく目撃される。
高ノ瀬 オオヤマレンゲ群落	オオヤマレンゲはモクレン科の落葉低木で、通常 6 月下旬から 7 月上旬頃、径 10 センチほどの芳香のある気品な白い花を咲かせることから「天女の花」と呼ばれている。徳島県の絶滅危惧Ⅱ類にも指定されており、2012（平成 24）年 12 月 20 日付けで市の文化財に指定されている。
アサギマダラ	アサギマダラは、チョウ目タテハチョウ科マダラチョウ亜科に分類されるチョウの 1 種。翅の模様が鮮やかな大型のチョウで、長距離を移動する。アサギマダラの成虫は長年のマーキング調査で、秋に日本本土から南西諸島・台湾への渡り個体が多く発見され、または少数だが初夏から夏にその逆のコースで北上している個体が発見されている。剣山にも生息している。
ススキ(植物)	ススキとは、イネ科ススキ属の植物。尾花ともいい秋の七草の一つ。また茅（かや。「萱」とも書く）と呼ばれる有用植物の主要な一種。にし阿波の傾斜地農業を考えるうえで重要な植物の一つであり、畑の畝と畝の間に敷き詰める形で活用される。土砂の流出を防ぐ作用、土を保温・保湿させる作用、土に養分を供給する作用など様々な役割を果たす。
阿波の青石	徳島県剣山系一帯で産出される緑泥片岩の別称。水にぬらすと青く見えることからその名前が付いた。日本庭園の石に利用されるなど全国的にも有名。

歴史・文化

祖谷のかずら橋	シラクチカズラ（学名サルナシ）を使って架けられたつり橋。長さ約45m、幅約2m、高さ約14m。起源は諸説あり、平家が源氏の追っ手から逃れるために架けられた(植物の橋のためいざという時に切り落とせる)という説と、空海が祖谷を訪れた際に、地元で困っている人たちのために架けたという説がある。「祖谷のかずら橋」は、古来、祖谷地方に13か所あったと伝えられており、その中で唯一残されていたのがこの地に架かっていたかずら橋。1923（大正 12）年に、重末小学校の廃校により、かずら橋が消失されたと記録に残されている。しかし、1928（昭和３）年に復元を望む地元有志の声により、この地に復元された。日本三奇橋の一つとして、年間約30万人が訪れる名所となっている。老朽化に伴い 3 年に 1 回架け替えが行われており、架け替えには約 6 トンのシラクチカズラが使われる。1955（昭和 30）年に国の重要有形民俗文化財に指定されている。
小便小僧	1901（明治34）年から1920（大正9）年にかけて開通した祖谷街道の道中、高さ約200mの絶壁から放尿している少年を模した像。当時の道路開通工事関係者たちがかつてそこで度胸試しをしていた、という逸話があり、その話をもとに作られたと言われている。1968（昭和 43）年に彫刻家で徳島大名誉教授の河崎良行氏が制作。
落合集落	東祖谷にある集落で湧き水の多さや日当たりの良さから、古くから多くの人が住み集落が形成されている。地区内は山腹から麓にかけての斜面に石垣で屋敷地をつくる山村集落であり、江戸時代中期から後期にかけて建てられた伝統的建造物が多く残し、石垣や里道、社叢などの周辺環境とともに一体となった歴史的風致が見られる。2005（平成17）年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。
名頃集落	剣山ふもとに位置する東祖谷の集落。住民およそ30人の集落であるが、人間そっくりのかかしが300体近く存在している。ドイツ人の観光客がたまたまそこを訪れた際に、その光景を動画で撮影し、youtube でアップしたところ有名となり、多くの観光客が訪れる場所となった。
木村家	東祖谷釣井に位置する山間部の民家。建築年代は1699（元禄12）年で、祖谷地区における最古の民家である。建築工法や間取りから祖谷地区を代表する民家として、1976（昭和51）年に国の重要文化財に指定されている。

箸蔵寺	箸蔵寺は四国別格二十霊場第十五番札所であり、828（天長 5）年、弘法大師が金毘羅神のご神託を受けて七堂伽藍を建て、自ら神像を刻み本尊として開基したといわれ、千年を超える歴史をもつ寺である。また藩政時代には水上安全と火伏せの神として、郷町の池田町や郷町並みの扱いを受けた井川町の刻みタバコ業者や船頭など舟運関係者の信仰を多く集めた。2004（平成 16）年には国の重要文化財に指定されている。
雲辺寺の遍路道	四国霊場第六十六番札所である雲辺寺への遍路道で、池田町からの入り口である佐野からは、およそ 5ｋｍの道のり。標高 910mに位置する雲辺寺との標高差は 600mにもなり、場所によっては這うようにあがらなければならないほどの傾斜のきついところがあり、お遍路さんが転落してしまいそうになることから「遍路ころがし」とも呼ばれている。2017（平成 29）年に国の史跡に指定されている。
瀧寺	およそ 1200 年前（大同年間、西暦 806～810 年）に弘法大師（空海）が開いた寺で、国の重要文化財に指定されている木彫りの「聖観音立像」がまつられている。像は、藤原時代の一木造りで、ずんぐりした感じの体、短い首、大きな宝髪、型の角張ったところなど、古様が残っている。毎年一回、正月 29 日の縁日にご開帳があり、その穏やかな顔立ちを拝顔することができる。
賢見神社	海抜 400m の大渡峯に位置し、仁賢天皇の御鎮守である。精神病、ものの気（け）つき・五穀豊穣・海上安全の守り神であり、県内外に多くの信者をもつ。
うだつの町並み	池田町や井川町は、製造された刻みタバコが、全国に広がり販路が増えるにつれ、町は繁栄した。その繁栄を示すのがうだつ（袖壁）に始まり、持ち送り、虫籠窓、なまこ壁など、特に外観に凝った意匠が用いられた商家が競うように建てられ、うだつのあがった商家が軒を並べ、重厚な町並み景観が形成されている。
塩塚高原野焼き	標高 1,043m、徳島県・愛媛県にまたがっており、東西に長くのびた高原には樹々がなく、秋には銀色に輝くススキ野原である。また、晴天時には遠く瀬戸内海や山陽道が望める。夏早朝の八合霧は壮観である。毎年 3 月下旬~4 月下旬の時期には、ススキ野原を焼く「野焼き」のイベントがある。

いけだ阿波おどり	阿波踊りの起源は明らかではないが、徳島藩主蜂須賀家政が阿波に入国し、城山に築城したことを祝って踊った盆踊りが始まりで、本来、盆に故人の霊を慰める為の念仏踊りが、これを期に阿波踊りとして盆に踊るようになったものである。はじめは徳島城下のみであったものが、たちまち全県的に広まったとあり今日に伝えられている。池田町では、現在も伝統的な町並みを舞台に、夏の伝統行事の阿波踊りが、毎年 8 月 14 日から 16 日にかけて踊られている。
神代踊	西祖谷山村にある天満宮では、旧暦の6月25日に雨乞い踊りとして神代踊が奉納されている。この踊りの起源は菅原道真が大干ばつによって稲の植え付けに苦労していた農民のために、今の香川県綾歌郡綾川の下流にあった城山に祭壇を設けて、各種の踊りを催して雨乞いの祈願を行った。その結果、たちまち雨が降り田植えができるようになり、農民達は喜んだという。これを機に、雨乞いの祈願と踊りは、全国的に広まり、その際に歌われた民謡と踊りの一部が流れ流れて全国各地で行われるようになったという。西祖谷山村で行われている太鼓踊り、笠踊りも、その一部が伝えられ今日の神代踊の起源になったものだと言われている。1922（大正11）年に皇太子殿下（後の昭和天皇）が行啓の折、台覧されたときから「神代踊」と呼ばれるようになった。1976（昭和51）年に国の重要無形民俗文化財に指定されている。
世界農業遺産	社会や環境に適応しながら何世代にもわたり継承されてきた独自性のある伝統的な農林水産業と、それに密接に関わって育まれた文化、ランドスケープ及びシースケープ、農業生物多様性などが相互に関連して一体となった、将来に受け継がれるべき重要な農林水産業システムを認定する制度。世界農業遺産は国際連合食糧農業機関(FAO)が認定する制度であり、徳島県西部地区はその伝統的な傾斜地農耕システムが評価され、2018（平成 30）年に認定を受けた。現在日本では 11 地域が認定されている。
山城の妖怪	山城地区は、危険な崖や淵、細くて暗い山道が多く危険と隣り合わせの場所であったため、子どもたちを危険から遠ざけるために 110 以上の妖怪伝説が残っている。道の駅大歩危の施設内には妖怪に出会える「妖怪屋敷」がある。妖怪伝説の多さを生かし妖怪文化の普及に貢献していることが認められ、2008（平成 20）年世界妖怪協会（会長　故水木しげる氏）から、四国の秘境山城・大歩危妖怪村として「怪遺産」に認定された。

児啼爺	山城地区の妖怪の中で、発祥地として「ゲゲゲの鬼太郎」要キャラクターである児啼爺が伝えられている。山中で不気味な赤ん坊の声で泣く妖怪とされ、人間が抱き上げると重たくなって離れないといわれている。
コエグロ	「コエグロ」とは畑の肥料とするもので、立ち棒の周囲にカヤ束を渦巻状にグロ巻きにしたもので、10 月～11 月の秋頃、カヤ場で刈り取られたカヤ（ススキ）を春まで保存するものである。にし阿波の傾斜地農業のシンボル。
にし阿波の漆器文化	にし阿波では「半田漆器」に代表されるような漆器文化が栄えていた。また、三好市内でも「漆」のつく地名が多いことから、山林の中に漆の木が多く存在していたであろうことが想像される。現在漆職人は山城地区に一人存在しているのみであり、漆文化の継承が課題になっている。
平家落人伝説	徳島県三好市の祖谷には、幼い安徳天皇と平教経（たいらののりつね）（国盛・くにもり）一行がこの地に逃れ平家再興の望みをつないだという『もうひとつの平家物語』が語り伝えられている。1184 年の壇ノ浦の戦いに敗れ、平氏一門の武将たちは覚悟を決め、海に入水し、幼い安徳天皇も祖母である二位尼に抱かれて、西の海に身を投げたと言う。また、祖谷平家伝説の主人公の一人、平教経（以下、平国盛）も源氏の武者二人を道連れに海に沈んだといわれている。しかし、壇ノ浦で亡くなったといわれる安徳天皇も平国盛も、実は影武者だった・・・。屋島の戦いで敗れた後、平国盛（教経）の一行は、ひそかに幼い安徳天皇をお守りしながら、この祖谷の地にやって来て、山深い祖谷の地で平氏再興の望みをつないでいたといわれている。
池田城	池田城は、徳島県三好市池田町ウエノにあった日本の城。この地域は阿波国の最西端に位置したため大西城とも呼ばれていた。1585（天正 13）年、蜂須賀家政が阿波国の領主となり、阿波九城の一つの支城として整備した。牛田一長、中村重勝が城代として入ったが、1638（寛政 15）年、一国一城令により廃城となった。池田町市街地の北側、吉野川に面する約 30m の高さの上野台地上に位置し、現在の諏訪神社、池田幼稚園、池田小中学校あたりまでの範囲で方形の構造であったと見られている。幼稚園には石垣が残っており、2019（平成 31）年に市の史跡に指定されている。

食

祖谷そば	祖谷地方の郷土料理。黒く、太く、短い麺が特徴。つなぎをほとんど使わないためそば粉の本来の味を楽しめる。地元では正月、婚礼、祭りなどのあらゆる行事の料理として使われている。
三好市の緑茶	大歩危・祖谷地区は深く急峻な渓谷地帯となっており、昼夜の寒暖差が大きい点、霧が発生しやすい気象条件からお茶の栽培にとって適した環境となっている。5 月初めに一番茶の収穫、6 月末に２番茶の収穫、10 月に番茶の収穫を行う。品種は「やぶきた」など。山城の妖怪伝説に絡めた「妖怪茶」が地元のスーパーでは販売されていたりする。
あめご(あまご)	サクラマスの陸封型の１つ。ヤマメと二分する形で流通する。もともと山間部の貴重なタンパク源で、地域的な産物であった。また渓流釣りの主なターゲットであり、釣り人だけがひそかに楽しんでいた味覚だったともいえる。旬は春から夏。赤味は薄く、微かだが川魚の風味がある。かずら橋近くの売店で塩焼きが売られている。
ごうしゅういもと田楽	ごうしゅういもは、通常のジャガイモより小粒であるが、肉質がしまっており、串に指しても割れず、粘り気があり味も濃いのが特徴である。こうした特徴を生かし、この地方では多くが田楽に使われてきた。田楽は「デコ（人形）マワシ」と呼ばれ、煮炊きした「ごうしゅういも」に、こんにゃく、石豆腐に味噌を全体に付け、竹の串にさし、囲炉裏であぶりながら廻して食べる食文化がある。
ひらら焼き	「ひらら」とは「平たい石」の意味で、吉野川で取れるアユやアメゴを河原にある平たい石の上に乗せて、野菜やこんにゃくとともに焼き上げたのが始まり。具から出るだしや旨味が石の間から逃げないように、石の周囲に味噌で土手を作るのが特徴。

施設・アクティビティ

ラフティング	日本有数の激流「大歩危小歩危」などを舞台に大型ゴムボートで一気に川下りするアクティビティ。2017（平成 29）年には三好市で世界選手権大会が行われた。
ウェイクボード	モーターボート等に持ち手(ハンドル)の付いたロープを設置して航行し、それをボートの後部で握った人が板状の滑走具に乗り、曳航されながら水面を滑り、ライディングやジャンプして技を競うウォータースポーツ。2018（平成 30）年には三好市で世界選手権大会が行われた。
井川スキー場	徳島県三好市井川町井内の北西の斜面にある 1927（昭和 2）年に造られた四国最古のスキー場。とくしま 88 景に選定されている。初心者から上級者まで 4 コースが設置されている。1997（平成 9）年に大規模改修工事を実施。人工造雪機が設置されており、安定した雪の供給がされている。
道の駅大歩危	1 階は山城に伝わる妖怪を展示した妖怪屋敷。山城の風土や文化を交えながら、様々な妖怪をパネルや映像で紹介している。2 階は石の博物館。大歩危峡谷周辺に分布する天然記念物の石をはじめ、各種変成岩や生活の中で役立っている鉱石、ギネスブックにも載っている世界最古の岩石や、宝石とその原石を 100 点余り展示している。
大歩危・祖谷温泉郷	大歩危・祖谷温泉郷は、祖谷温泉、祖谷渓温泉、新祖谷温泉、大歩危温泉、大歩危峡温泉の総称で、山々を眺めることができる大浴場や露天風呂が人気で、秘境のムードが漂う５つの温泉施設からなる。中でも祖谷温泉は、北海道のニセコ薬師温泉、青森県の谷地温泉とともに日本三秘湯の一つに数えられる。泉質はアルカリ性単純硫黄温泉であり、露天風呂はケーブルカーで谷底まで下りた位置にあり、紅葉の季節は絶景である。日本全国の温泉好きが選んだ「温泉総選挙 2018」において、大歩危・祖谷温泉郷が外国人おもてなし部門第１位に選ばれたほか、地域振興に資する創造的な取組を国内外に向けて発信した点が評価され、観光庁長官賞を受賞した。
かずら橋夢舞台	大型駐車場・イベント広場を備えたかずら橋近くの大型観光施設。施設内には、観光案内所をはじめ、料理実習や研修会議のできるスペース、物産館などがあり、祖谷そばや蔓工芸品など地元ならでは特産品が集まる。物産館内には、かずら橋の作り方や祖谷の暮らしなどを紹介した「祖谷のかずら橋ストーリー館」が併設され、かずら橋と共に暮らしてきた祖谷の風土をうかがい知ることができる。また、食事処「かずらばし亭」では名物「祖谷そば」のほか徳島ラーメン、各種定食も提供されている。

大歩危遊覧船	大歩危は、約２億年前から約１億年前に海底の奥深くで作られたといわれる地層が地殻変動や吉野川の浸食によって偶然姿を現した貴重な場所で、吉野川が四国山脈を横切るところに結晶片岩が水蝕されてできた渓谷は千態万様の奇観を見せている。深い渓谷と含礫片岩（徳島県指定天然記念物）、四季折々の渓谷美を間近で堪能できる。乗船所要時間は約 30 分。1909（明治 42）年に当時の逓信大臣（現在の総務大臣）だった後藤新平が「岩に題す 天下第一歩危の秋」と詠ったことで、天下の名勝として広く知られるようになった。遊覧船乗り場の駐車場脇に句碑が建てられている。
祖谷ふれあい公園	木製遊具や釣り場、水際遊歩道、てんとう虫モノライダー、キャンプサイトがあり、自然が満喫できる造りとなっている。また、2017（平成 29）年には、フォレストアドベンチャーがオープンし、地形を最大限に活用したキャニオンジップスライド、クリフチャレンジャー、バンプトラックのような体験型の遊戯施設を満喫することができる。
平家屋敷民俗資料館	平家屋敷民俗資料館は、堀川内記を祖先とする西岡家住宅を資料館としており、館内には、祖谷の歴史を物語る資料が展示されている。尚、資料館である主屋と隣接する土蔵は三好市の指定文化財である。
東祖谷歴史民俗資料館	平家の落人達や村民の懐かしい、昔の暮らしぶりを偲ぶことができる品々が数々展示してある。郷土文化保存伝承施設には、祖谷の平家落人伝説を語る遺品の数々など。2 階には 200 名収容のホールなども兼ね備えている。
奥祖谷観光周遊モノレール	2006（平成 18）年 8 月 29 日にオープンしたこのモノレールは、コースの全長とともに高低差 590m・最大傾斜 40 度・最頂標高 1,380m はどれも観光用モノレールとしては世界一を誇る。前後 2 人乗りで 12 台が運行されており、奥祖谷の急な斜面が続く一周 4,600m のコースを 65～70 分かけてゆっくり進む。
ツールドにし阿波	毎年 5 月中旬に実施するサイクリングイベント。あらかじめ指定されたコースをサイクルツーリストにおける総合的なテクニックを駆使して走破する。三好市池田湖水際公園を拠点に三好市、東みよし町、つるぎ町をめぐる。
四国まんなか千年ものがたり	四国山地を横断する四国の真ん中に位置し、多度津駅から大歩危駅を 1 日 1 往復する観光列車。「おとなの遊山」として気軽に楽しめる。

真鍋屋（MINDE）	刻みタバコの生産や木材商として栄えた地元の商家「真鍋家」から無償提供を受けた古民家を改修し整備したもので、交流拠点としての様々な機能を持つ地域交流拠点施設として再生された。施設内には、移住支援のサービス窓口や仕事や住まいを紹介する「コンシェルジュ機能」。起業・開業など新規事業の立ち上げを支援し、中・短期滞在のお試し住宅や事務所として貸し出す「インキュベーション機能」。交流スペースや会議室スペースとして活用できる「交流協働機能」の３つの機能を持たせ、多世代市民と移住者、マチを訪れる人、帰ってきた人が気軽に立ち寄れ、交流するきっかけづくりや、地元の魅力を再発見できる拠点として、2018（平成 30）年６月１日オープンした。
市内各キャンプ場	高さ 60mにかけられたつり橋からの景観が魅力の龍宮崖コテージをはじめ、かずら橋キャンプ村、塩塚高原キャンプ場、祖谷渓キャンプ村、イカワフィンランドコテージ、健康とふれあいの森など各地域ごとに魅力的なキャンプ場が四季を通じて自然を楽しむことができる。

※なお、上記観光資源のほか、三好市で進めているジオパーク推進に係る見どころ「ジオサイト」「カルチュラルサイト」「エコサイト」にも、ジオに関係する観光資源（https://miyoshi-city.jp/geopark）を列記している。

1-5 三好市の産業構造

本事業では三好市の産業構造を概観するために「平成23年度徳島県産業連関表」[3]より、ノンサーベイアプローチ[4]によって簡便的に「平成23年度三好市産業連関表」を作成した。この結果について以下、簡単に示す。

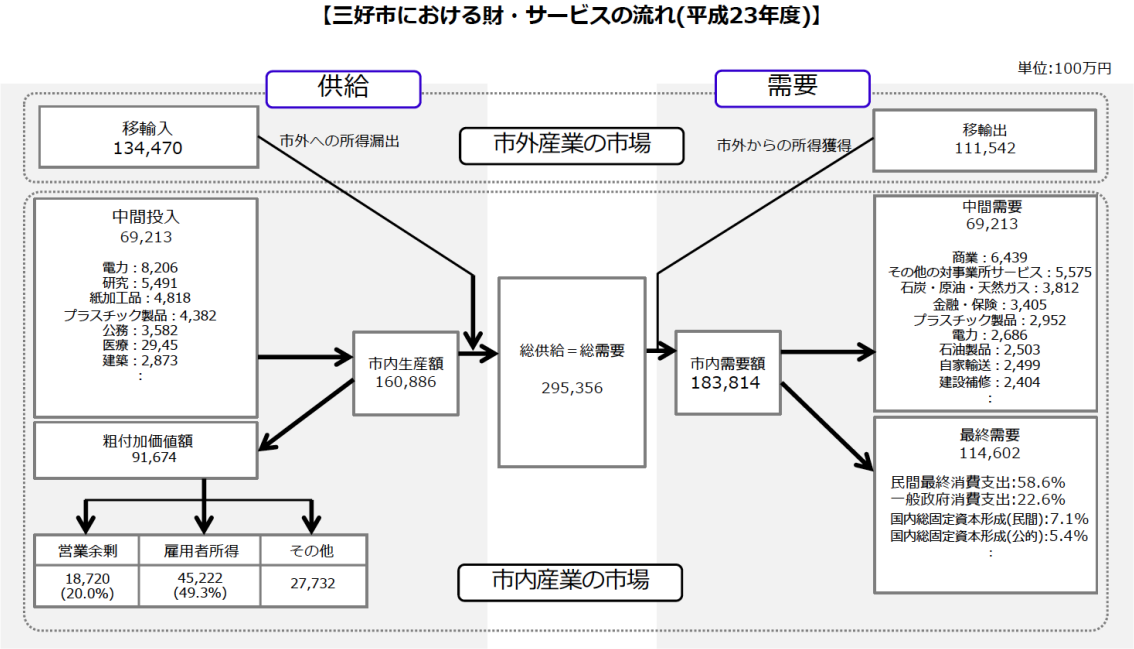


図. 三好市における財・サービスの流れ

資料　株式会社矢野経済研究所

三好市に中間投入額は「69,213 百万円」となっている。更に粗付加価値は「91,674 百万円」となっている。これらから市内生産額は「160,886 百万円」となる。三好市への移輸入額の合計は「134,470 百万円」となることから、三好市の総供給は「295,356 百万円」となる。

一方で中間需要額は「69,213 百万円」、最終需要額は「114,602 百万円」となることから市内需要額は「183,814 百万円」となる。市外への移輸出額は「111,542 百万円」となる。以上から、三好市の総需要は「295,356 百万円」と推計された。

[3] 国により整備されている経済統計表。一国の産業間の取引について記録がされている。

[4] 新規の調査などを用いずに推定などにより地域産業連関表を作成する方法。

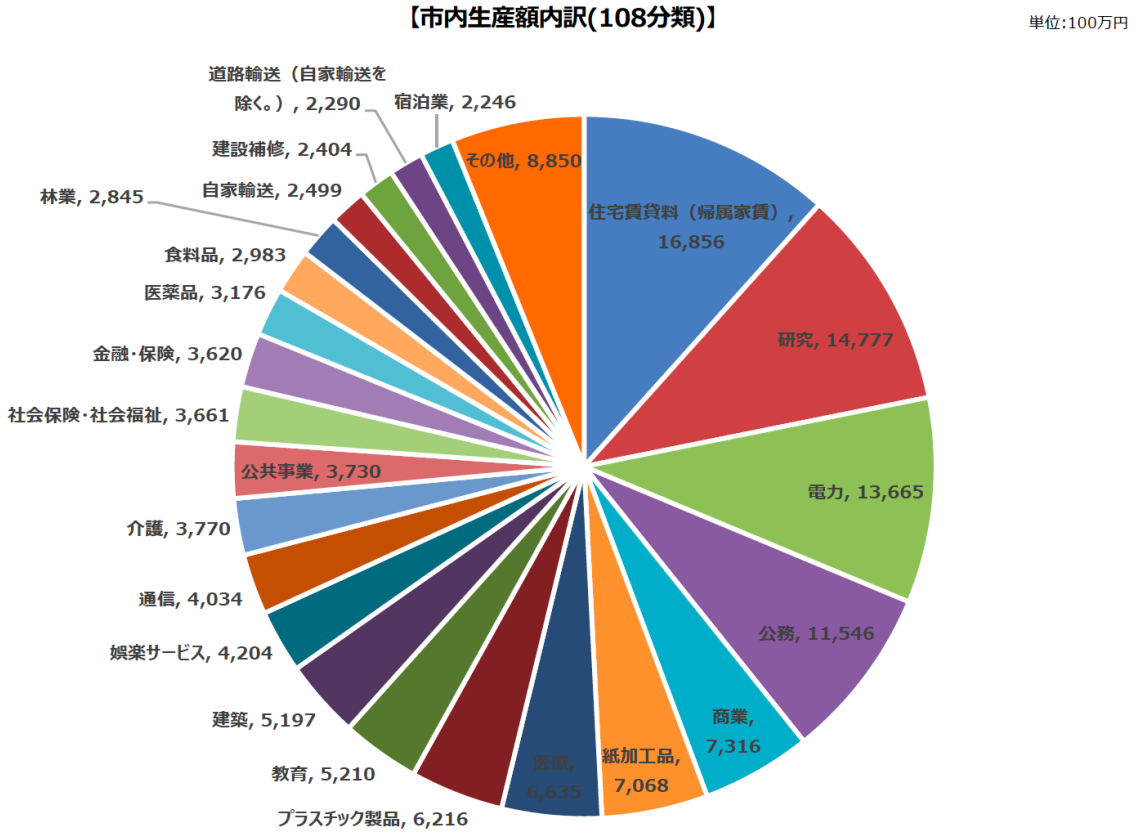


図. 産業構成比

資料　株式会社矢野経済研究所

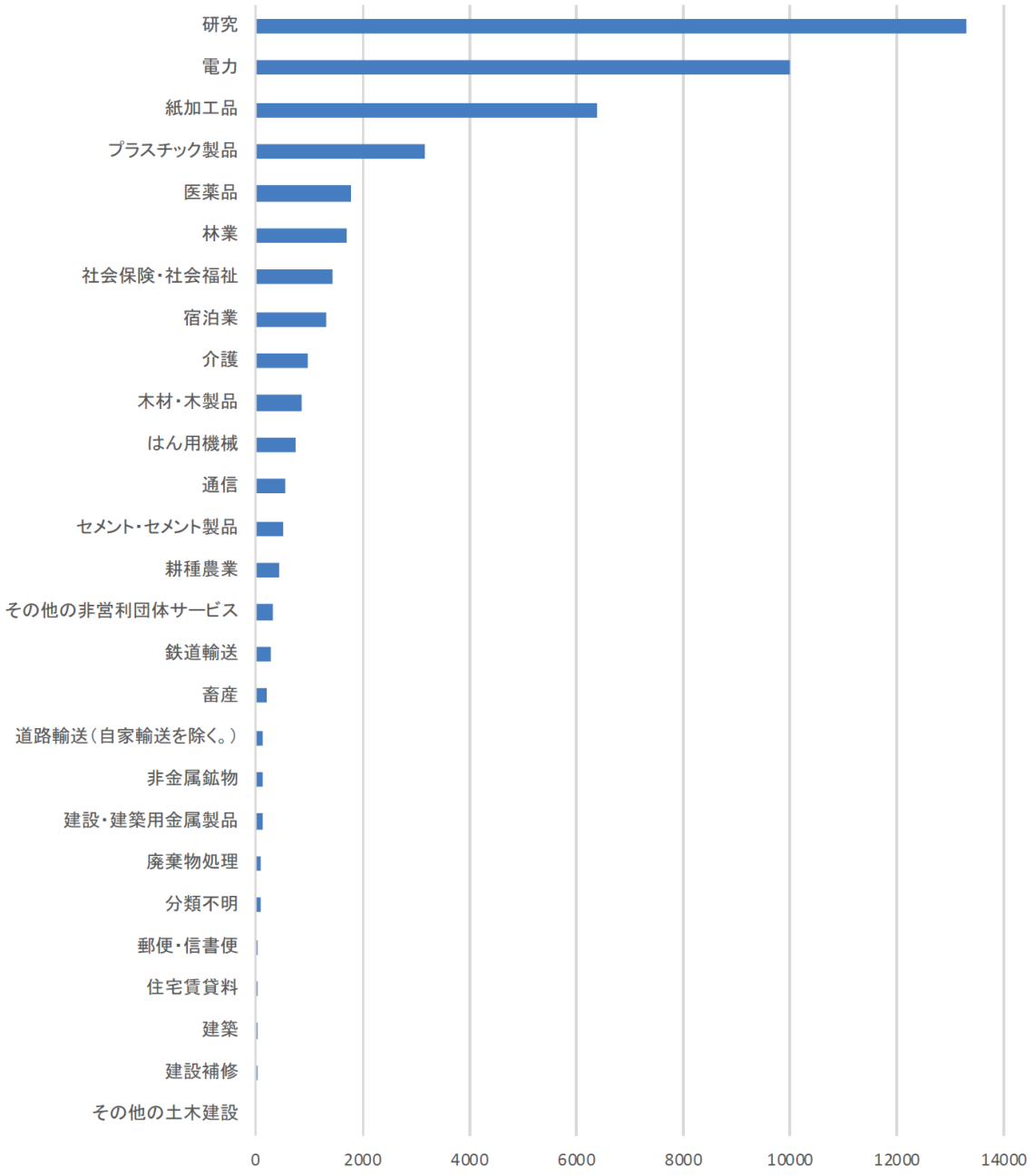
三好市の産業構造を見ると、「住宅賃料(帰属家賃)」が最も構成比が高く「16,856 百万円」となっている。ついで「研究」が「14,777 百万円」、「電力」が「13,665 百万円」、「公務」が「11,546 百万円」となる。「商業」が「7,316 百万円」、「紙加工」が「7,608 百万円」、「医療」が「6,635 百万円」、「プラスチック製品」が「6,216 百万円」と続く。

またこれらの産業別の市内への外貨獲得の貢献度を示しているのが次ページである(地域収支)。「宿泊業」は、比較的外貨を獲得している産業であることがわかる。

「地域外マネーを獲得する産業であるか」

〈地域収支〉
定義：地域収支＝移輸出-移輸入
解釈：
・地域収支がプラス⇒地域内で消費する以上に生産しており地域外から稼いでいる産業
・地域収支がマイナス⇒地域内の消費を満たす域内生産がなく、地域外に生産を依存している産業

（単位：100万円）



資料　株式会社矢野経済研究所

第2章　観光市場の動向

2-1 世界の観光市場

UNWTO「Tourism Highlights 2018 Edition」によれば、2017（平成29）年の世界の国際旅行者到着数(International Tourist arrivals)は前年比約7%増加の13億2,600万人となり、世界の国際観光収入(International Tourist Receipts)は1兆3,400億米ドルとなった。

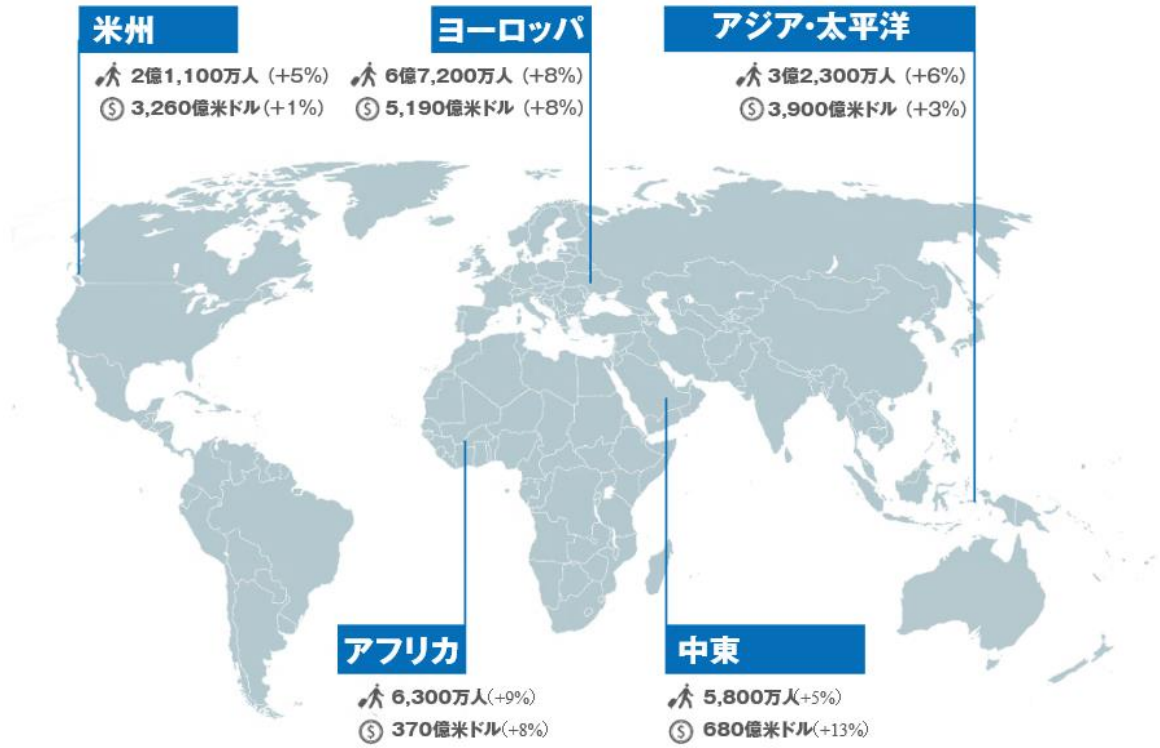
この国際旅行者到着数(International Tourist arrivals)の地域別のシェアはヨーロッパが51%、アジア・パシフィックが24%、アメリカが16%、アフリカが5%、中東が4%となっている。これを国別に見てみると、1位はフランス、2位はスペイン、3位はUSA、4位は中国、5位はイタリア、6位はメキシコ、7位はイギリス、8位はトルコ、9位はドイツ、10位はタイとなっており、日本はTop10にはランクインしていませんが、11位にランクインしている。

一方で、世界の国際観光収入(International Tourist Receipts)の地域別のシェアはヨーロッパが39%、アジア・パシフィックが29%、アメリカが24%、アフリカが3%、中東が5%となっている。これを国別に見てみると、1位がアメリカ、2位がスペイン、3位がフランス、４位がタイ、5位がイギリス、6位がイタリア、7位がオーストラリア、8位がドイツ、9位がマカオ、10位が日本となっており、国際観光収入(International Tourist Receipts)のランキング10位にてやっと日本が登場する。

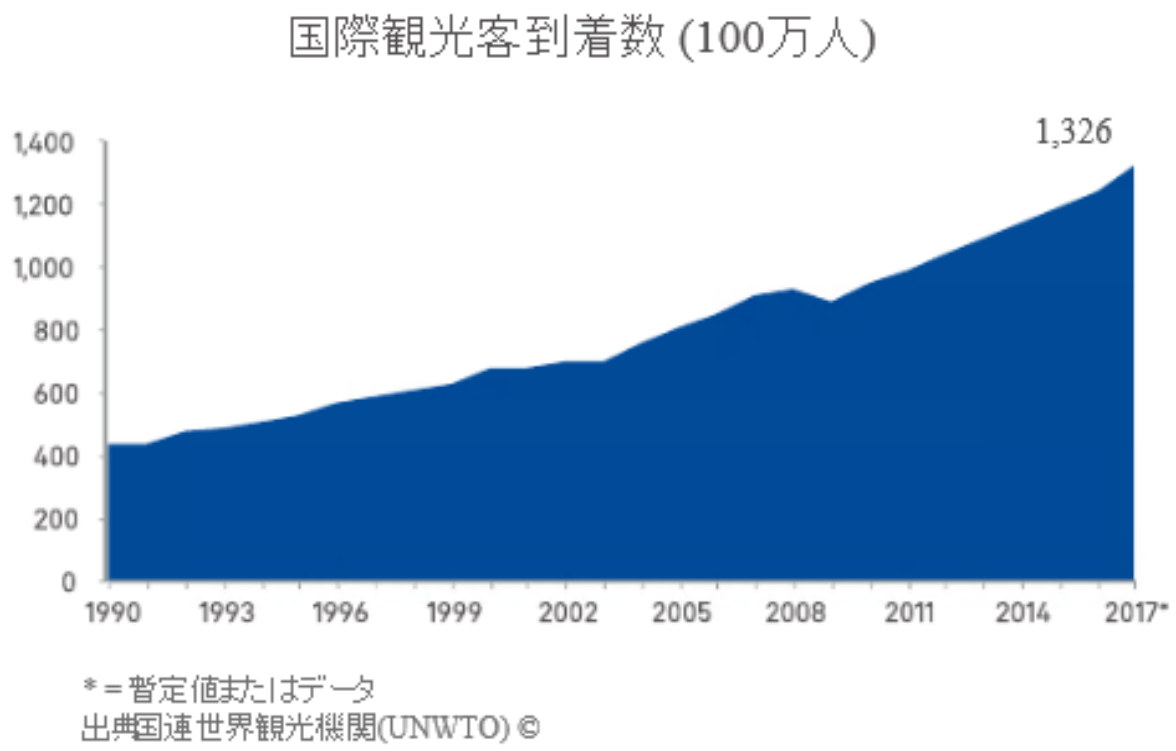
国際的な移動モードの内訳は57%が「飛行機(Air)」、37%が「陸路(Road)」、4%が「水路(Water)」、2%が「鉄道(Rail)」となっている。

また、国際旅行の目的の内訳は13%が「ビジネス(Business and professional)」、55%が「余暇(Leisurerecreation and holidays)」、27%が「知人・親戚の訪問(Visitingfriends&relatves,(VFR),health,religion,other」,「不明(Not specific)」となっている。

国際旅行者到着数(International Tourist arrivals)の1990（平成2）年から2017（平成29）年の推移は以上のグラフで示される。1990（平成2）年以降、9.11同時多発テロやリーマンショックなどの国際的に大きなインパクトのある出来事により成長が鈍化、またはマイナスとなる年も見られるが、順調に拡大していることが読み取れる。つまり国境を超えて世界を移動する人の数は増え続けている傾向がある。これは経済成長を遂げた新興国からのアウトバウンドの増加や、LCCの進展、交通網の発達、などが理由として挙げられている。世界はより狭く、そして国境を超え移動する人々は増え続けており、後述する日本における訪日外国人旅行者の増加もこうした世界におけるマクロな潮流の一部であることがわかる。



注記2018年9月13日改正して更新
出典国連世界観光機関（UNWTO)©



出典　UNWTO「Tourism Highlights 2018 Edition」

2-2 日本の観光市場

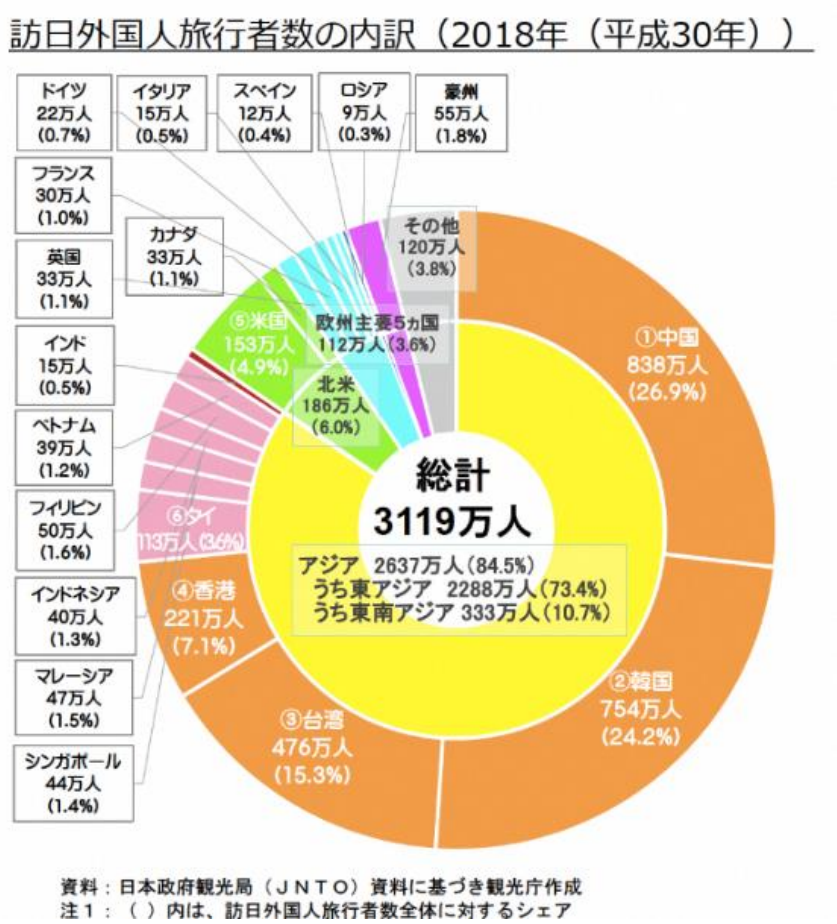
次に日本の観光市場の動向を概観する。

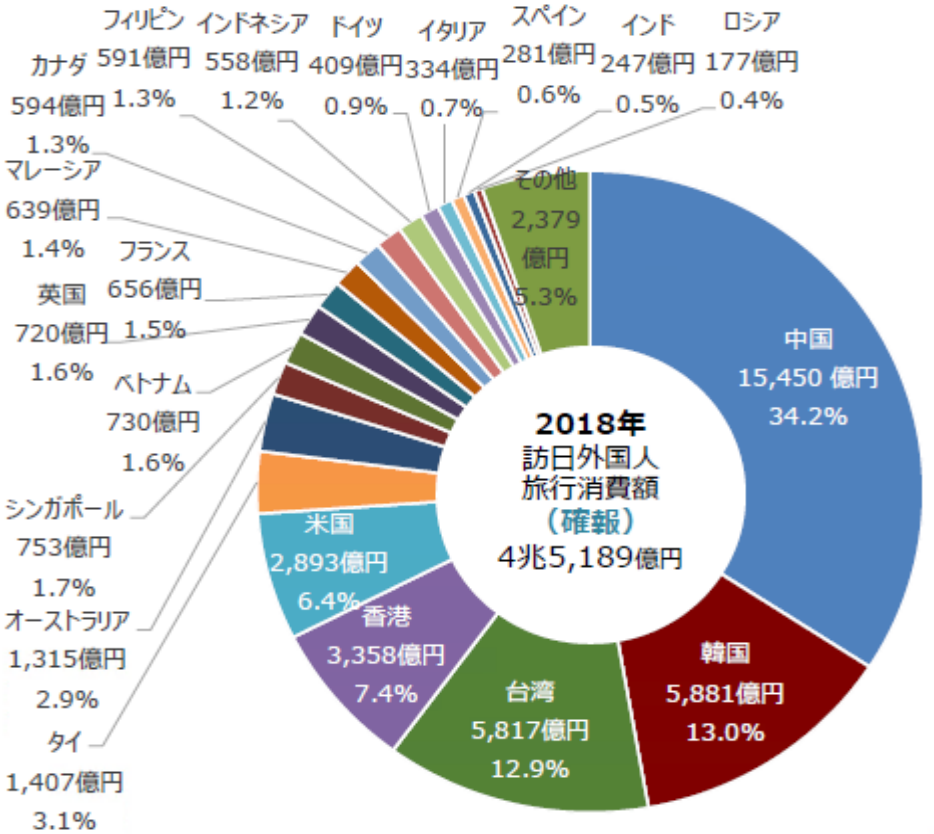
2018年(平成30年)の訪日外国人旅行者数は、3,119万人(対前年比8.7%増)となり、ビジットジャパンキャンペーン開始以降初めて3,000万人を突破した。

資料：日本政府観光局（ＪＮＴＯ）資料に基づき観光庁作成

訪日外国人旅行客の内訳は、アジアが全体の84.5%となり、中国が838万人、韓国が745万人、台湾が476万人、香港が221万人となっている。

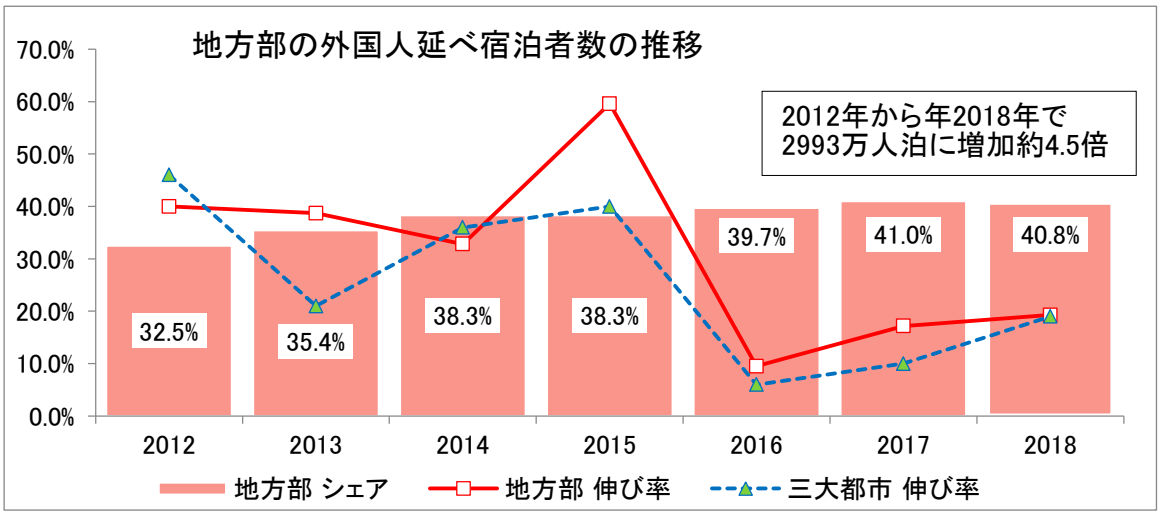
また、2018年の訪日外国人旅行消費額は、過去最高の4兆5,189億円となっている。これは観光が日本国にとって、重要な外貨獲得(及び、高い経済波及効果による)の手段になっていることを示しており、観光振興の重要性は年々増してきているということがわかる。





観光庁「訪日外国人消費動向調査 2018 年全国調査結果」

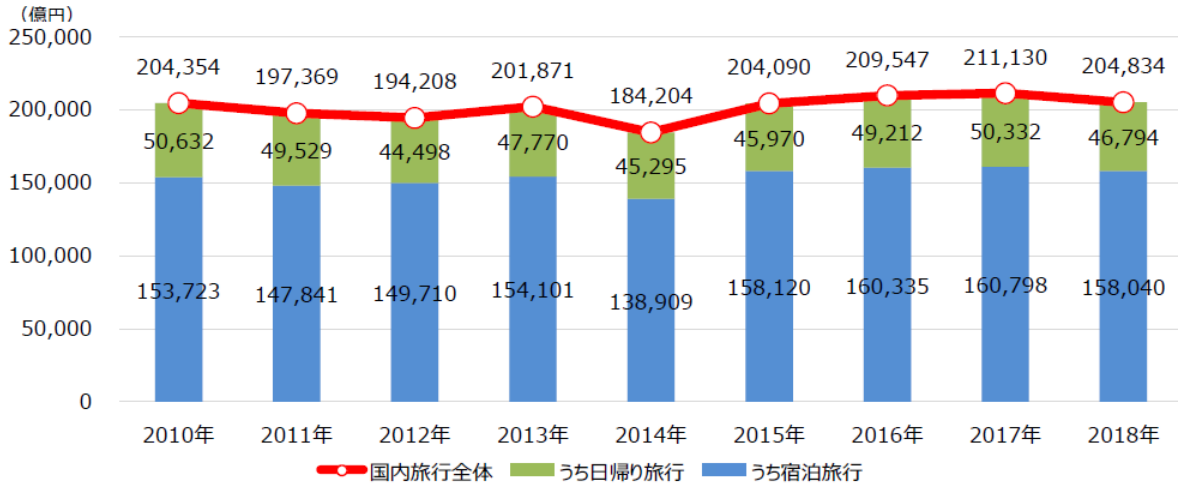
さらに、訪日外国人観光客の日本国内における観光動態で特筆すべきは、都市部から地方部への分散の拡大です。2017 年では、日本を訪れた外国人述べ宿泊者数の約 40.9%が地方部に宿泊していることがわかります。これは、訪日外国人観光客の増加は、特に地方部にとって重要な外貨獲得、そして地域経済活性化に重要な意味を持つことを意味しており、前段の「観光による地方創生」を裏付けるデータとなっている。



出典　観光庁「宿泊旅行統計調査」

次に日本人の観光動向を概観する。2018 年で日本人国内述べ旅行者数は 5 億 6,178 万人(前年比 13.2%減)、この内宿泊旅行が 2 億 9,105 万人(前年比 10.0%減)、日帰り旅行が 2 億 7,073 万人(前年比 16.5%減)となっており、前年数値から落ち込む形となっている。また 2018 年の日本人観光消費額は 20 兆 4,834 億円(前年比 3.0%減)となった。このうち、宿泊旅行消費額は 15 兆 8,040 億円(1.7%減)、日帰り旅行消費額は 4 兆 6,794 億円(前年比 7.0 %減)となっている。

【図表1】 日本人国内旅行消費額の推移（確報値）



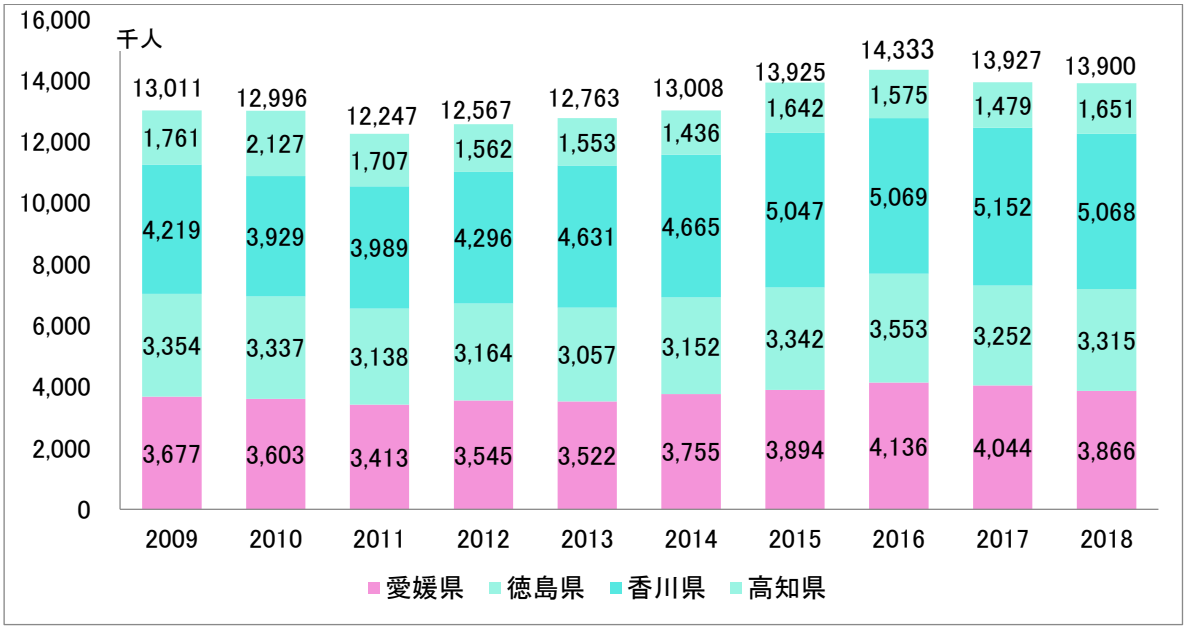
出典　観光庁「宿泊旅行統計調査」

2-3 四国の観光市場

・全体(主要観光地)の入込客数

四国の主要観光地の観光入込客数は、2018(平成 30)年度に 13,900 千人となっており、過去 10 年では 4 番目に高い水準となっている。県別の内訳をみると、香川県が最も多く(5,068 千人/2018 年度)、次いで愛媛県(3,866 千人)、徳島県(3,315 千人)、高知県(1,651 千人)の順となっている。なお、徳島県の観光入込客数は四国全体の約 24%を占めている。

四国の主要観光地の観光入込客数の推移



資料 四国の主要観光地入込状況について(四国運輸局)

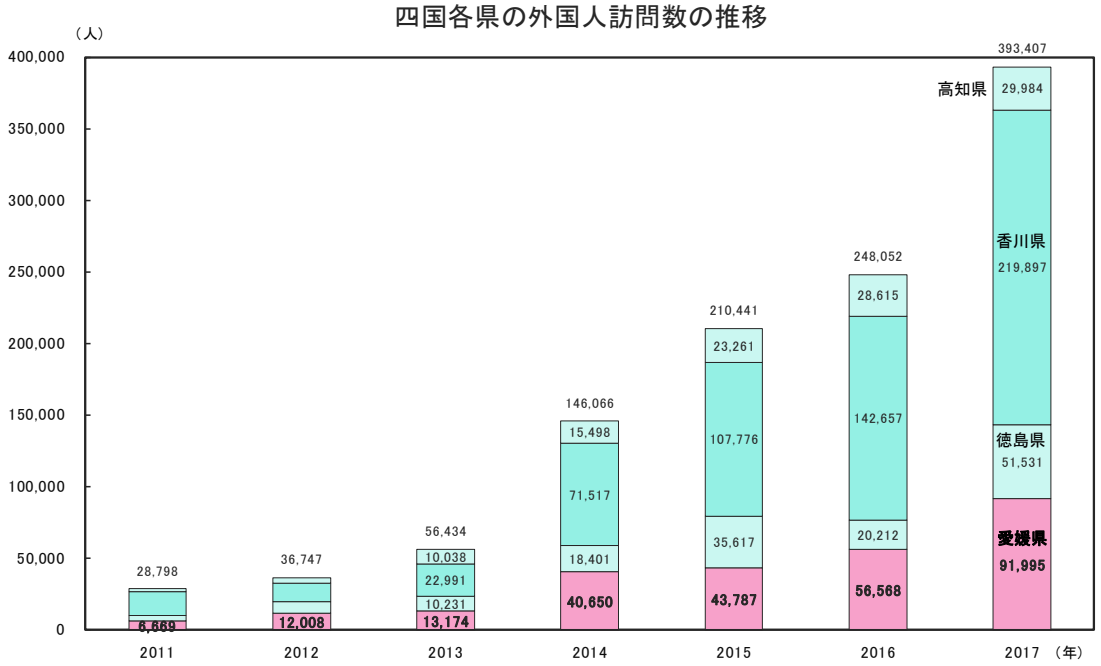
・入込客数の上位 10 先

四国の主要観光地の観光入込客数の上位 10 先(2018(平成 30)年度)をみると、愛媛県内の観光地が 3 カ所ランクインしており、「松山城ロープウェイ・リフト」が 1,283,477 人で最も多くなっている。

施設名			入込客数(人)
1 位	松山城ロープウェイ・リフト	愛媛県	1,283,477
2 位	ニューレオマワールド	香川県	1,070,158
3 位	文化の森総合公園	徳島県	955,428
4 位	道後温泉旅館協同組合	愛媛県	781,997
5 位	栗林公園	香川県	713,441
6 位	さぬきこどもの公園	香川県	645,287
7 位	マイントピア別子	愛媛県	605,775
8 位	国営讃岐まんのう公園	香川県	524,194
9 位	渦の道	徳島県	515,962
10 位	屋島山上	香川県	494,984

四国の外国人訪問客数は、2017(平成29)年に393,407人となっており、前年比60%の増加となっている。県別の内訳をみると、香川県が最も多く(219,897人/2017年)、次いで愛媛県(91,995人)、徳島県(51,531人)、高知県(29,984人)の順となっている。

四国各県の外国人訪問数の推移



注1 訪問目的には、観光･レジャー目的に加え、商談等その他ビジネス、親族･知人訪問、研修等が含まれる

注2 2011年のデータは4月から12月まで(9カ月間)のもの

資料 訪日外国人消費動向調査(観光庁)、訪日外客数(日本政府観光局)

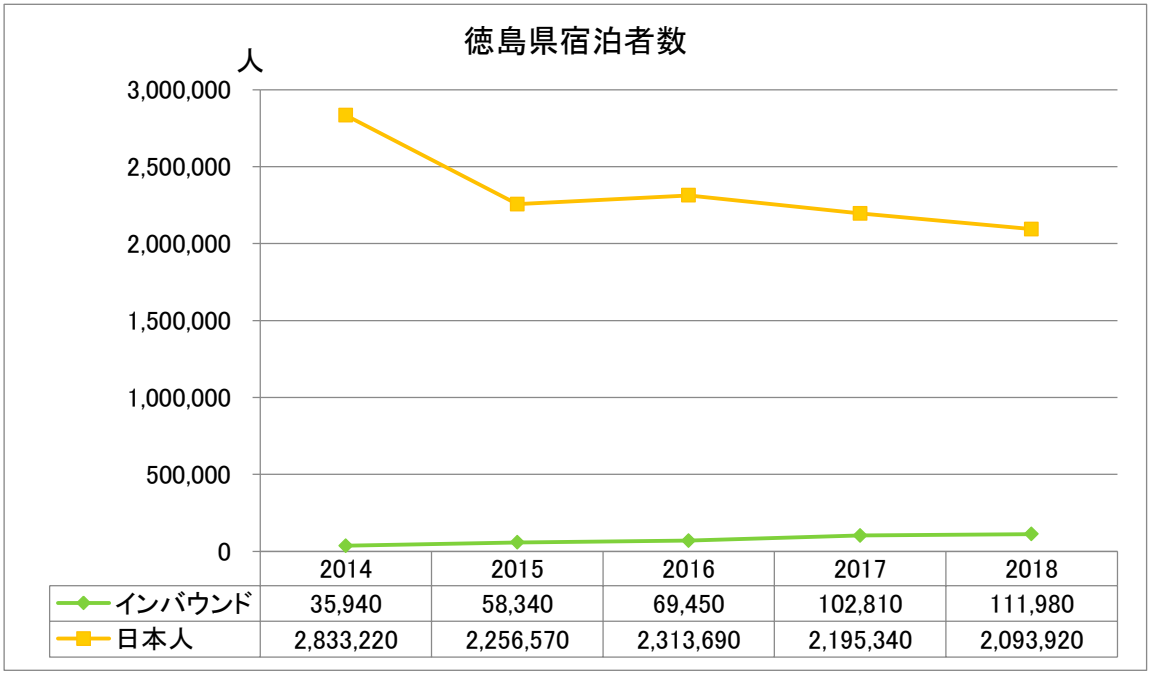
・広域観光周遊ルート

現在、国の認定を受けている広域観光周遊ルートとして、以下の 11 ルートがある。そのうち、四国内の地域を対象に含むルートは、「No.4 美の伝説(関西広域連合ほか)」及び「No.5 せとうち・海の道(せとうち観光推進機構)」と「No.6 スピリチュアルな島～四国遍路～(四国ツーリズム創造機構)」の 3 ルートです。

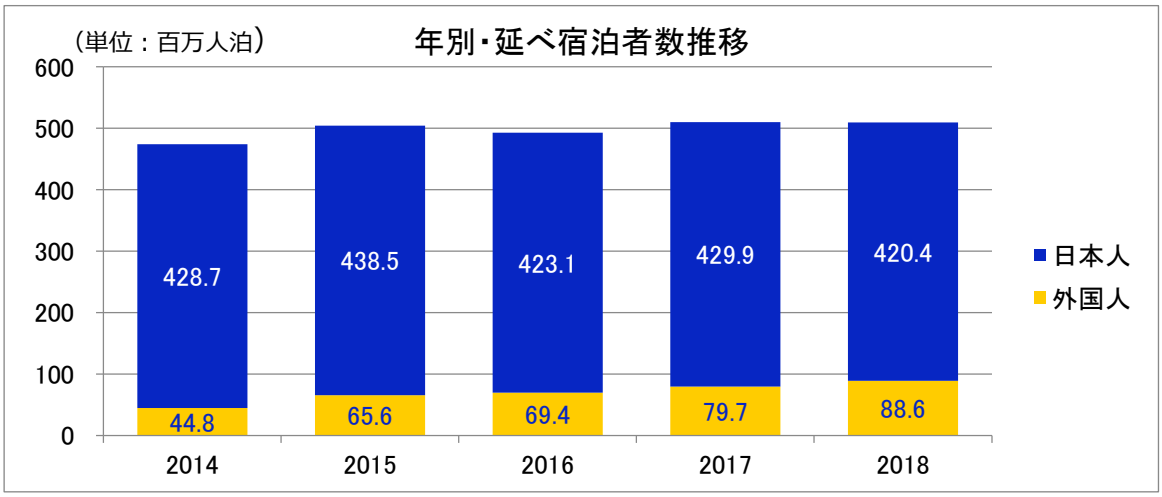
No	広域観光周遊ルート形成計画の概要	実施主体	モデルコースの名称
1	アジアの宝 悠久の自然美への道 ひがし北・海・道	「プライムロードひがし北・海・道」推進協議会	①Explore the Wonderland in summer ②Explore the Wonderland in winter
2	日本の奥の院・東北探訪ルート	東北観光推進機構	①四季が織りなす東北の宝コース ②三陸の恵みと復興コース ③日本海の美と伝統コース
3	昇龍道	中央日本総合観光機構	①Dragonコース　②Nostalgicコース ③Great Natureコース　④Ukiyo-eコース
4	美の伝説	関西広域連合 関西経済連合会 関西観光本部	①KANSAI～世界遺産と絶景 伝統と自然の美の競演～ ②KANSAI～日本の精神文化の聖地 美の伝承～
5	**せとうち・海の道**	**せとうち観光推進機構**	**①新ゴールデンルート～新たな西日本発見の旅 ②歴史と芸術に出会う美のルート ③空と島と海に溶け込むサイクリングルート**
6	**スピリチュアルな島～四国遍路～**	**四国ツーリズム創造機構**	**①四国スピリチュアル・コース ②四国鉄道クラシカル・コース ③四国大自然ドライブ・コース**
7	温泉アイランド九州 広域観光周遊ルート	九州観光推進機構	①鉄道・バスで廻る九州の魅力満喫コース ②九州の歴史・自然をレンタカーで廻るコース ③火山の島・九州一周コース
8	日本のてっぺん。きた北海道ルート	きた北海道広域観光周遊ルート推進協議会	①The Top of Japan-夏 ②The Top of Japan-冬 ③The Top of Japan-離島めぐり
9	広域関東周遊ルート「東京圏大廻廊」	関東観光広域連携事業推進協議会	①自然大廻廊(太平洋)コース ②自然大廻廊(日本海)コース ③江戸文化回廊コース
10	縁(えん)の道～山陰～	山陰インバウンド機構	①日本の原風景(世界遺産・日本遺産見聞録) ②ジオパーク＆ナショナルパーク・アクティビティ
11	Be.Okinawa 琉球列島周遊ルート	Be.Okinawa琉球列島周遊ルート形成推進協議会	①Gateway to Okinawa Lifestyle&Culture ②Secrets of Okinawa History ③Wild Adventure of Okinawa Archipelago

2-4. 徳島県の観光市場

観光庁「宿泊旅行統計調査」によると徳島県全体における延べ宿泊者数の推移はグラフ(上)となっている。このグラフからは、徳島県の日本人述べ宿泊者数は減少傾向にあることがわかる。これは全国数値であるグラフ(下)も同様のトレンドであるが、全国数値では日本人の減少分をインバウンド観光客の数値で補っていることがわかる。徳島県は、こうした日本人宿泊者数の減少分を補うほどのインバウンド観光客述べ宿泊者数が増加していないことがわかる。

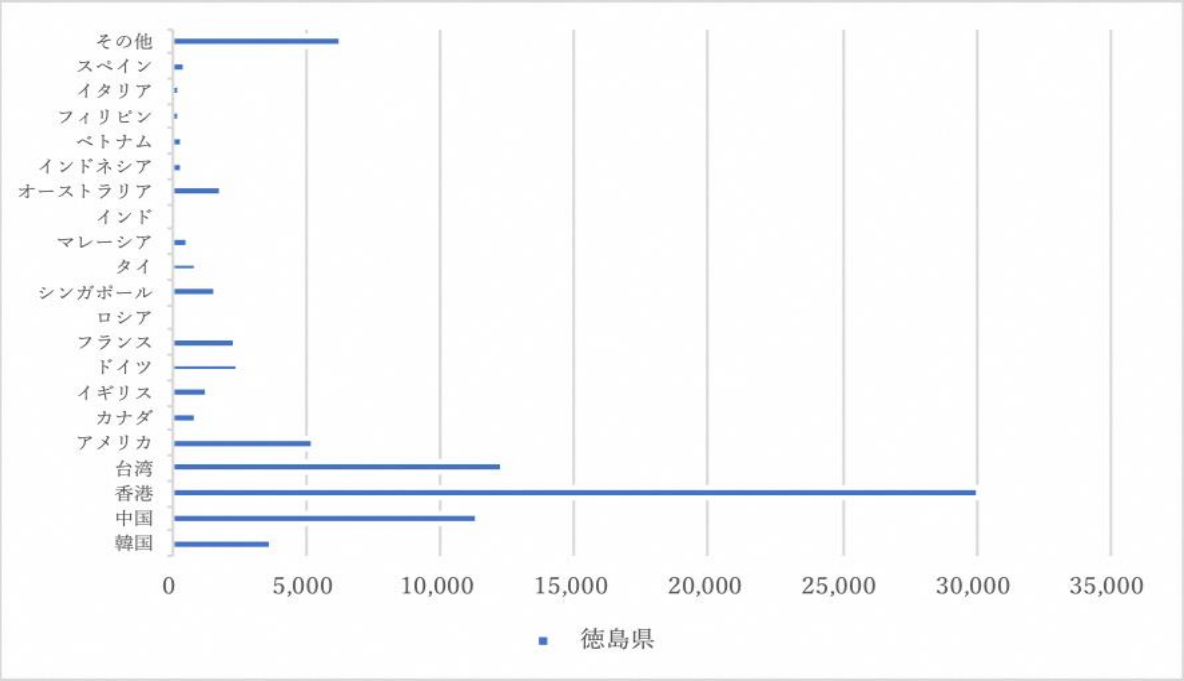


	2014	2015	2016	2017	2018
インバウンド	35,940	58,340	69,450	102,810	111,980
日本人	2,833,220	2,256,570	2,313,690	2,195,340	2,093,920



(出典)観光庁「宿泊旅行統計調査」

・延べ宿泊インバウンド観光客(国籍別)



(出典)観光庁「宿泊旅行統計調査」

徳島における延べ宿泊インバウンド観光客を国籍別に見ると「香港」「台湾」「中国」が多く、四国全体の傾向と一致していることがわかる。また以下の表には、四国における平均宿泊数と観光消費額が一覧となっている。これによると、徳島県におけるインバウンド観光客の消費単価は「33,600 円」となっており四国内で最も低い水準となっている。同様に平均泊数も「4.0 日」となっており、四国内で最も短い。

・平均宿泊数と観光消費額(平成 30 年)

【1 人当たりインバウンド総消費額】

徳島県		香川県		愛媛県		高知県	
回答数	消費単価	回答数	消費単価	回答数	消費単価	回答数	消費単価
383	33,600	1,472	51,646	600	49,718	296	44,921

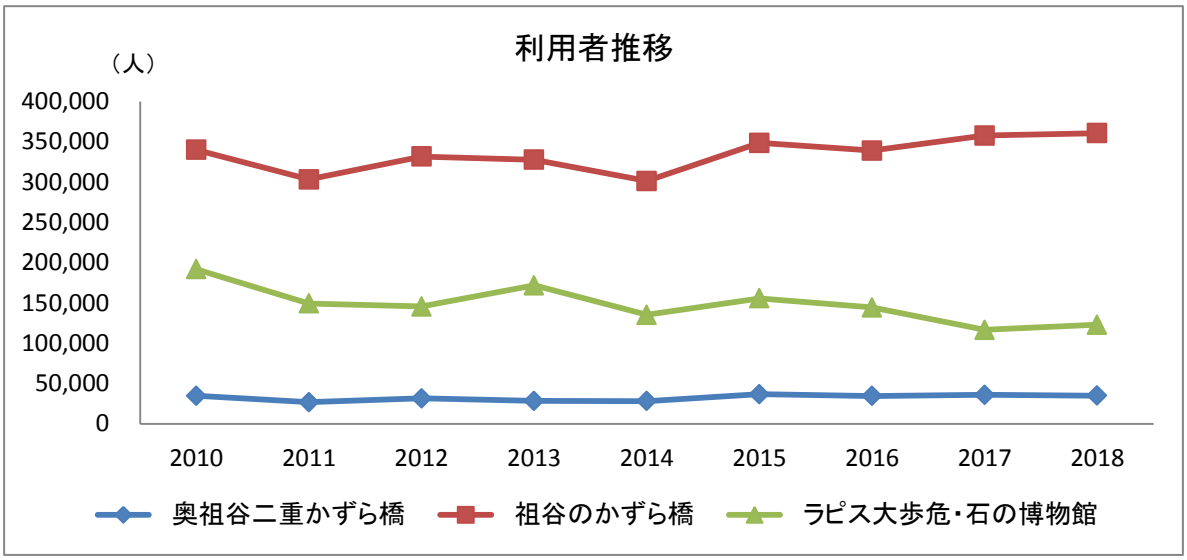
【1 日当たりインバウンド消費額】

徳島県		香川県		愛媛県		高知県	
回答数	消費単価	回答数	消費単価	回答数	消費単価	回答数	消費単価
383	8,365	1,472	11,390	600	7,718	296	9,551

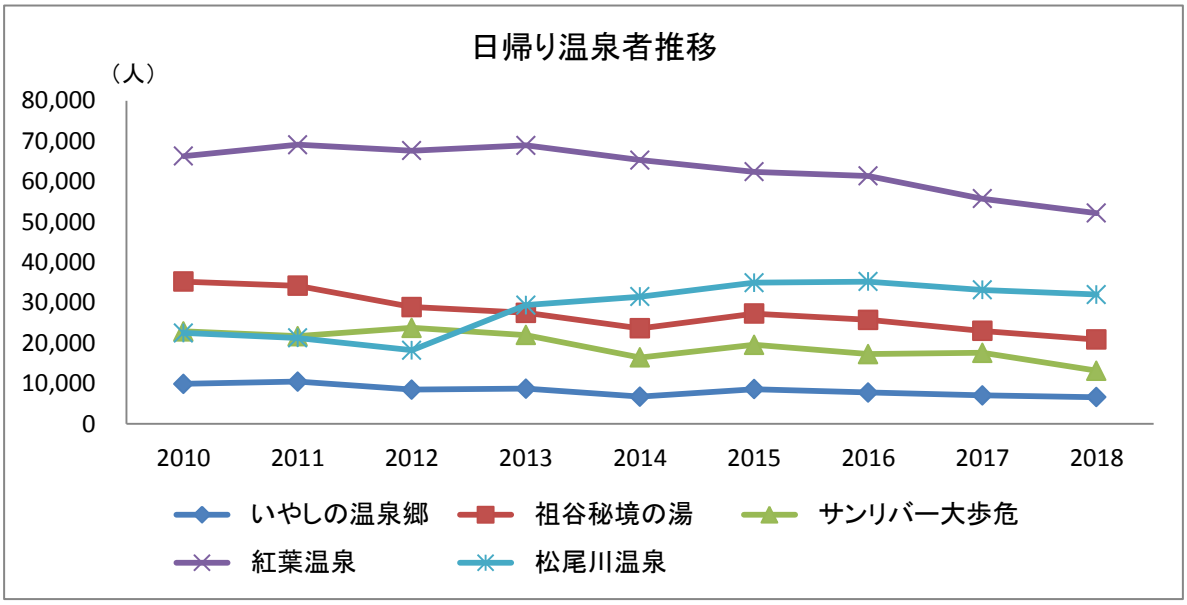
【県内平均泊数】

徳島県		香川県		愛媛県		高知県	
回答数	平均泊数	回答数	平均泊数	回答数	平均泊数	回答数	平均泊数
383	4.0	1,472	4.5	600	6.4	296	4.7

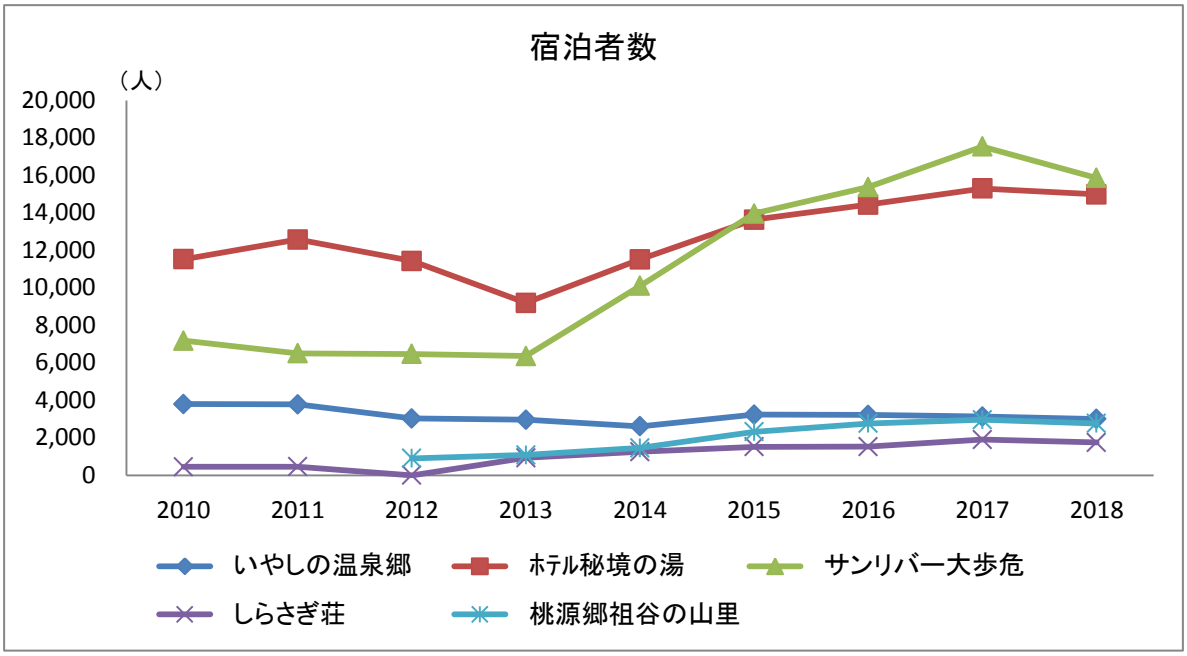
2-5. 三好市の観光客動向



以上は三好市における主要観光施設における入れ込み客数の推移である。概ね同水準を維持しながら推移していることがわかる。



以上は三好市における日帰り温泉施設の入場者数推移である。いずれも減少傾向にあることがわかる。



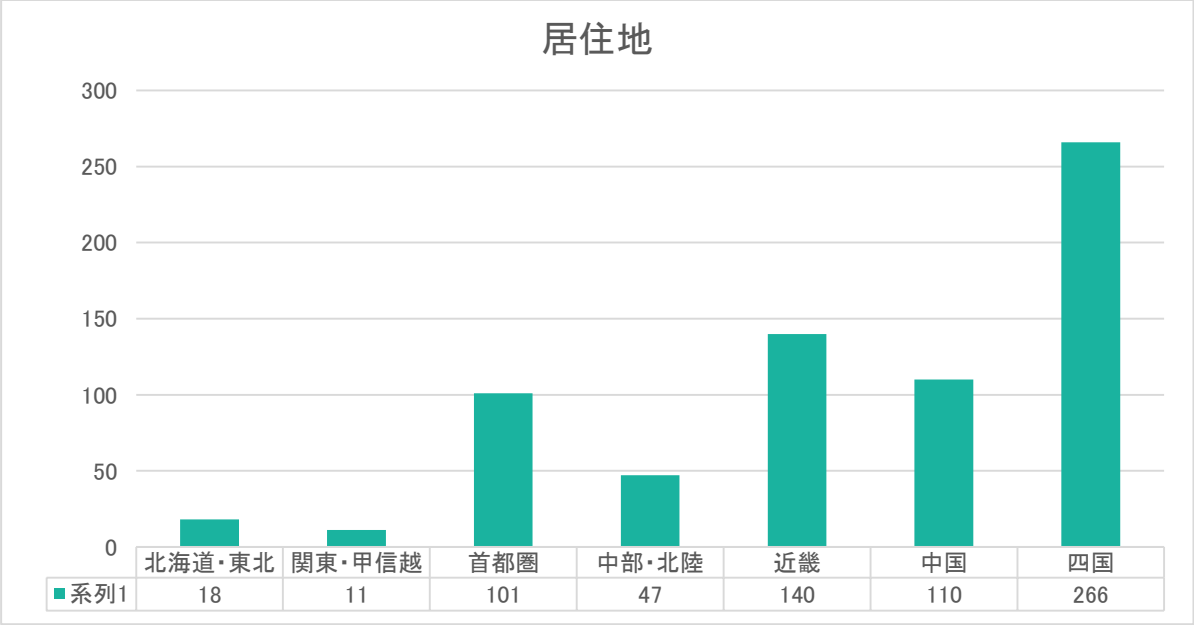
以上は三好市における市が関与する宿泊施設の宿泊者数の推移である。2013（平成 25）年度を底に回復傾向にあったが、2018（平成 30）年度は減少に転じたことがわかる。

国内観光客向けアンケート調査

・日本人観光客に向けたアンケート結果

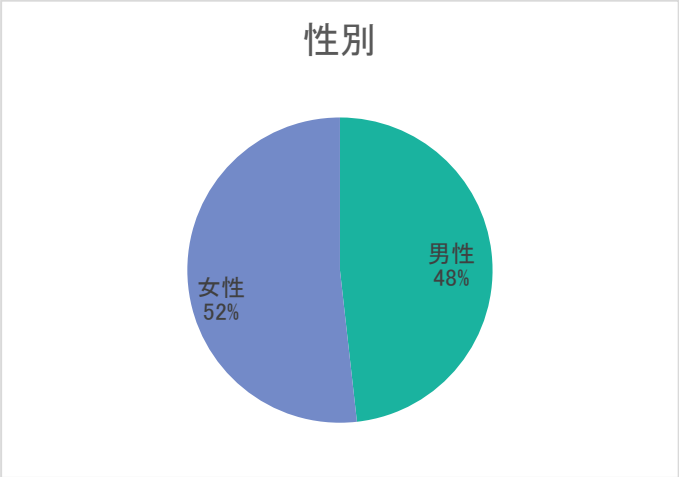
「JR 大歩危駅」および「かずら橋夢舞台」の 2 箇所において、日本人観光客に向けたアンケートを実施した。以下、その結果の要約である。アンケートのサンプル数は 711ss となる。

・観光客の居住地について

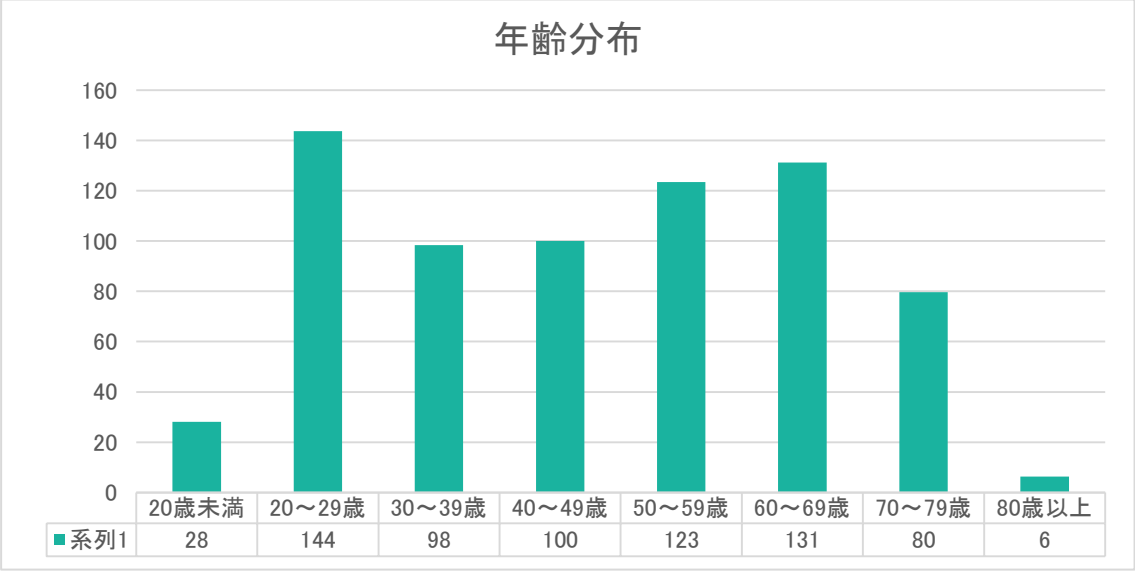


四国からの来客が最も多い傾向が見られる。次いで近畿、中国となっている。

・観光客の性別について

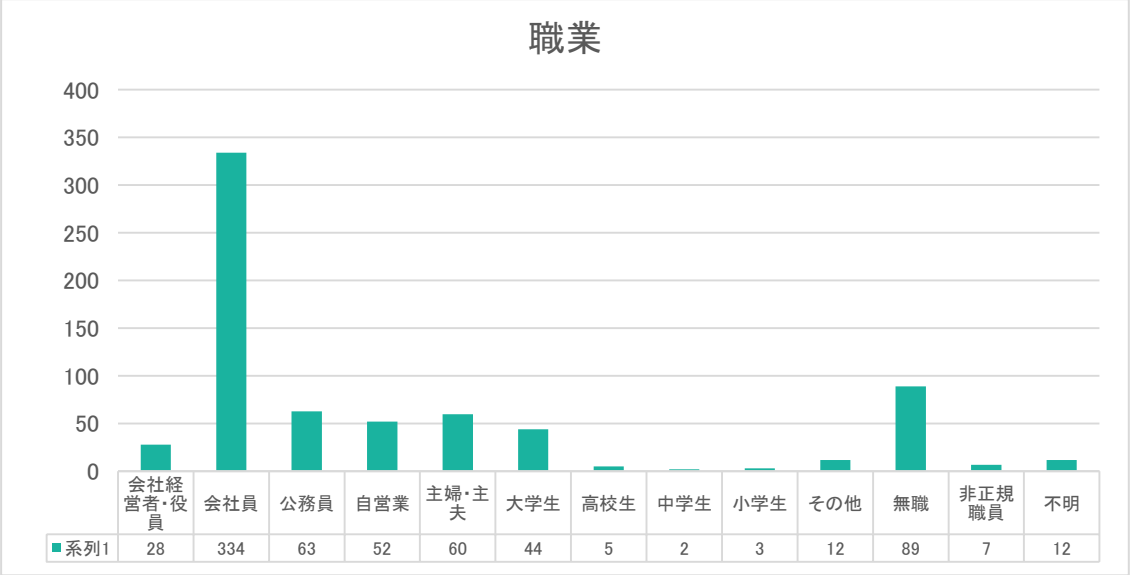


・観光客の年齢について



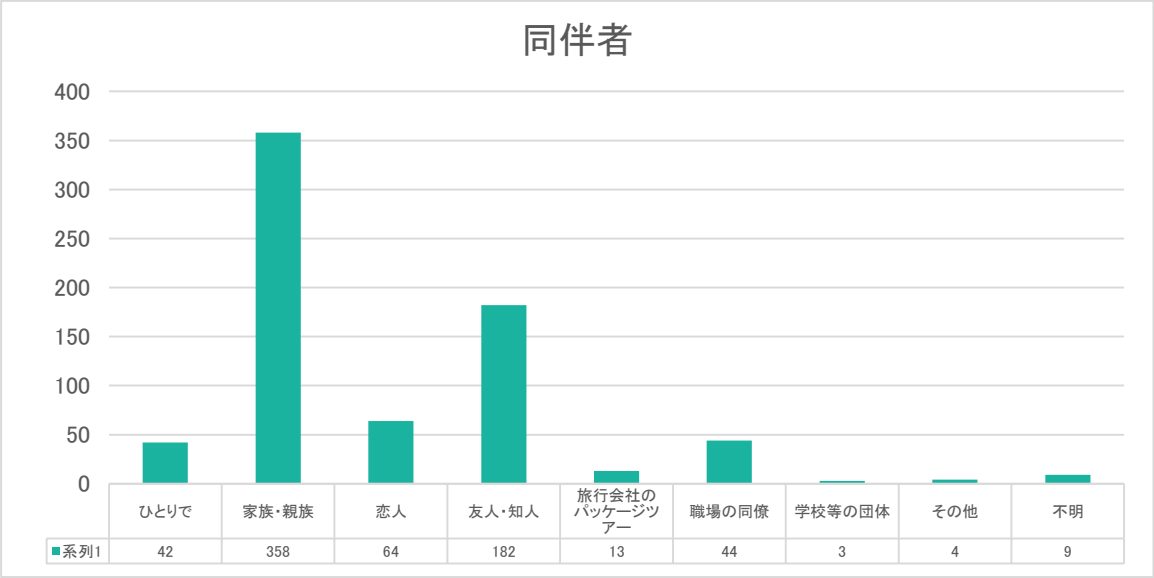
観光客の年齢は 20 代が最も多くなっている。次いで 60 代、50 代と続く。

・観光客の職業について



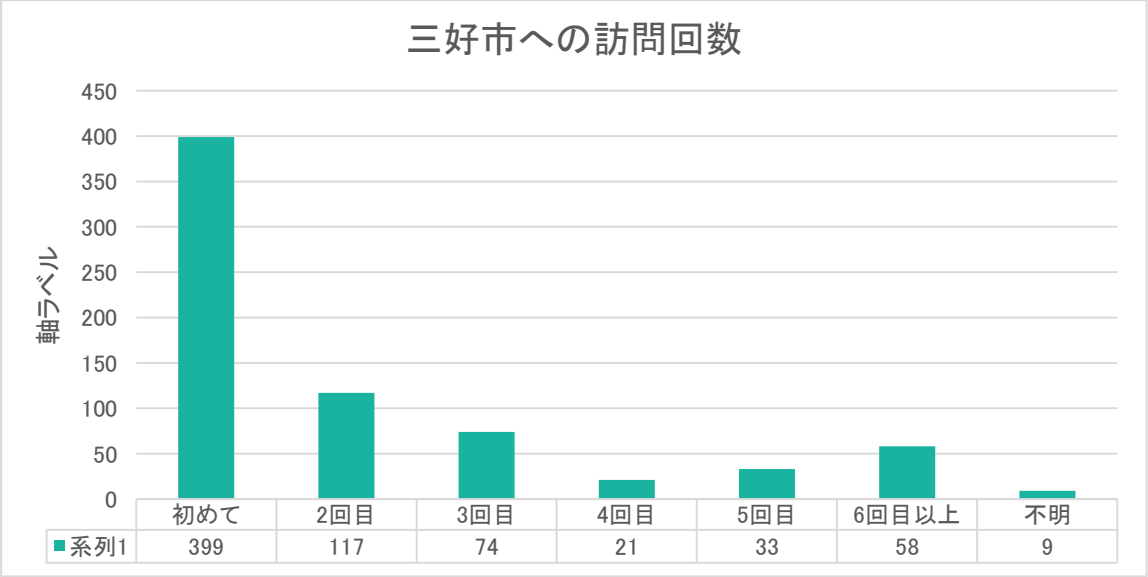
観光客の職業は会社員が最も多い。

・観光客の同伴者について



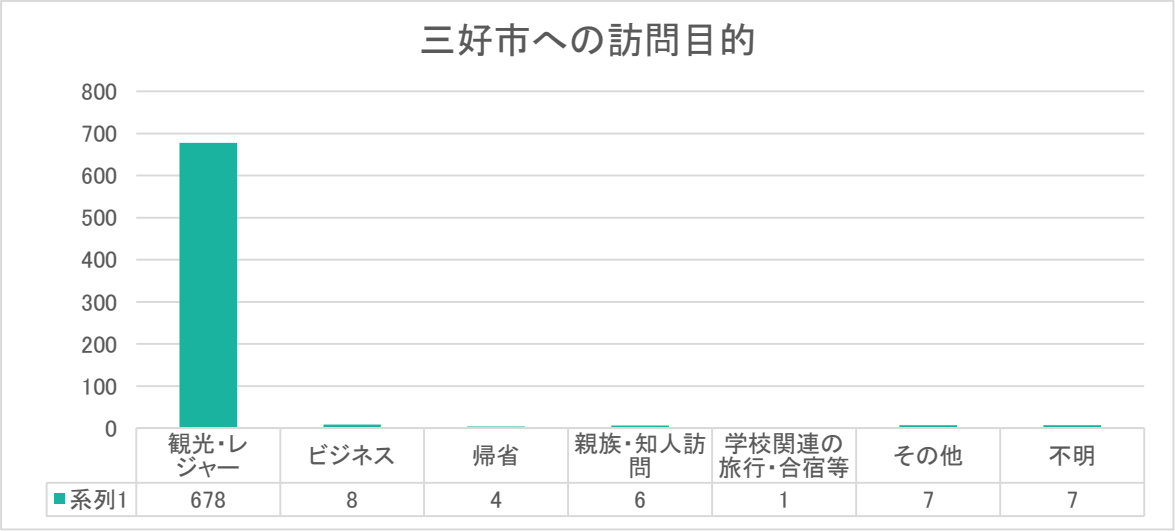
観光客の同伴者については、家族・親族が最も多く、次いで知人・友人となっている。

・観光客の三好市への訪問回数について



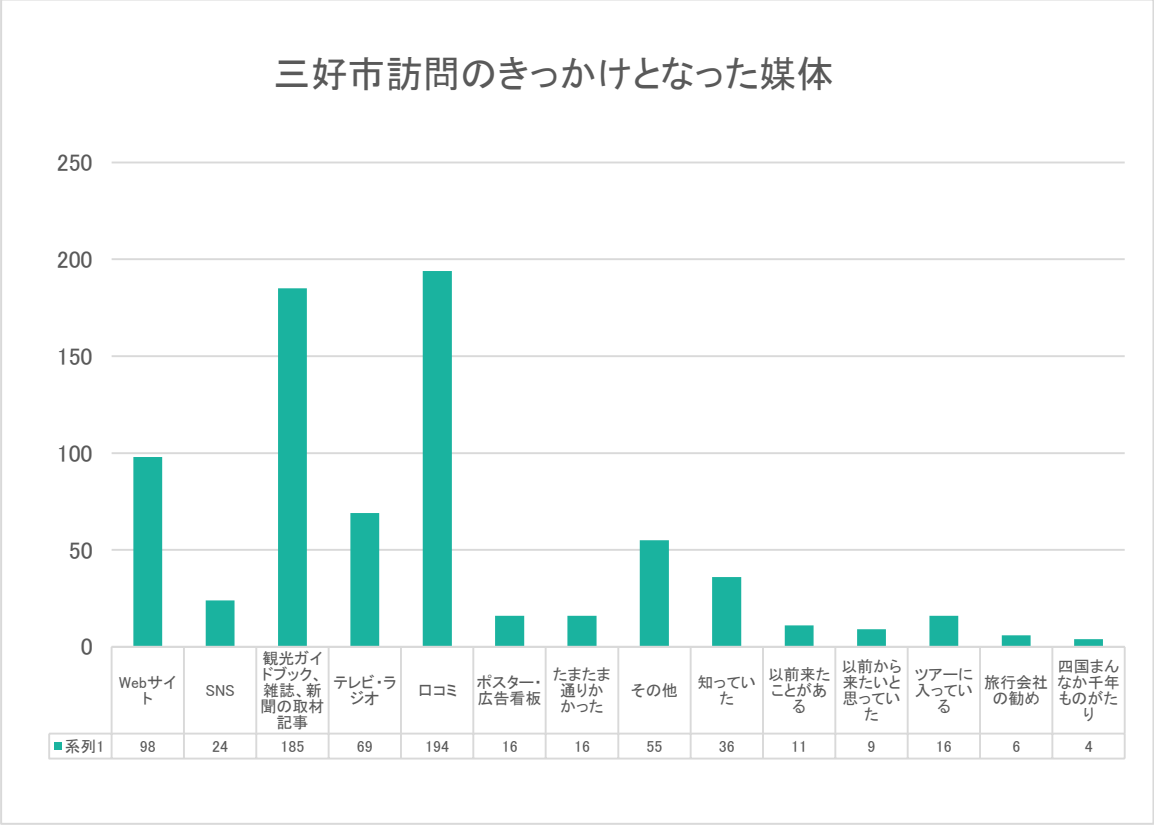
三好市への訪問回数は初めてが最も多い。注目すべきは6回目以上のリピーターも一定数確認されることである。

・三好市への訪問目的について



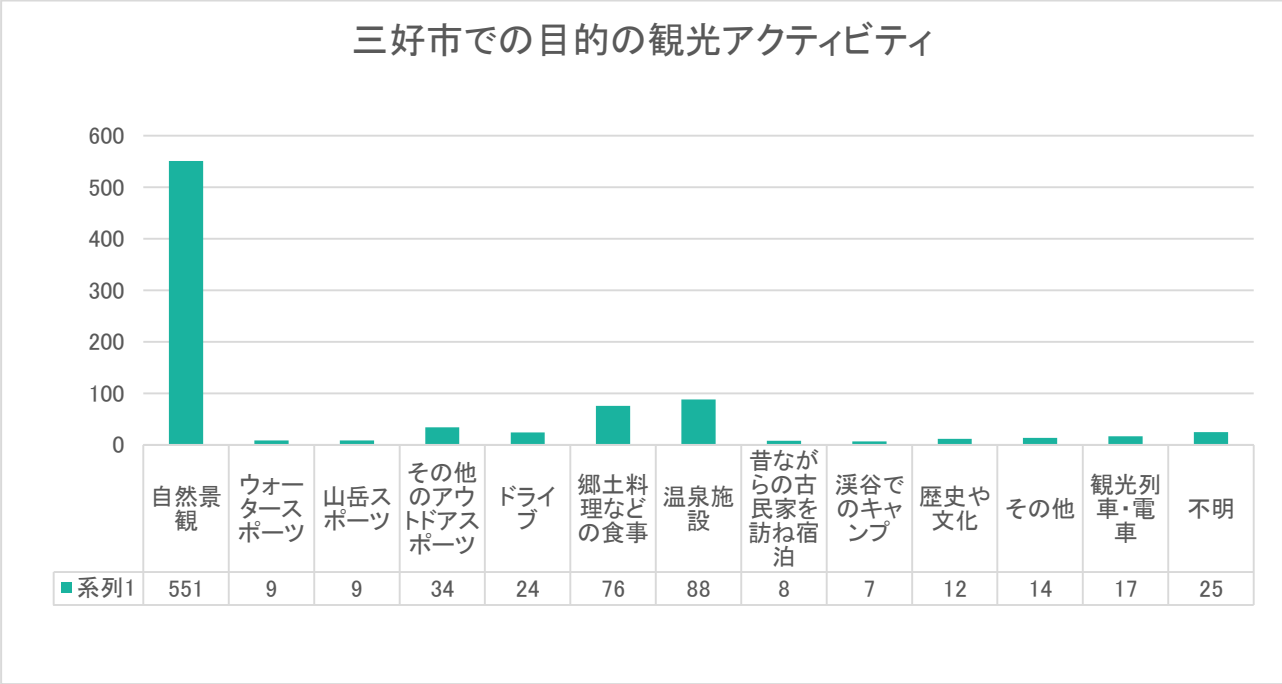
三好市への訪問目的は可能・レジャーが最も多くなっている。

・三好市訪問のきっかけとなった媒体について



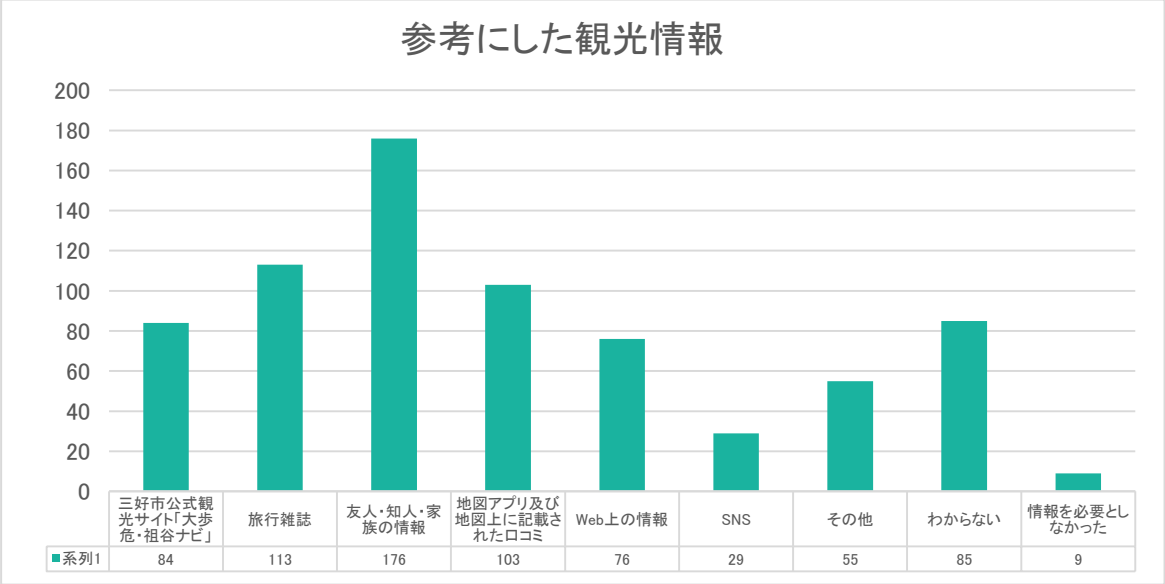
訪問のきっかけとなった媒体は口コミが最も高く口コミの重要性が確認できる。

・三好市での目的の観光アクティビティ（何を目的で訪れたのか）



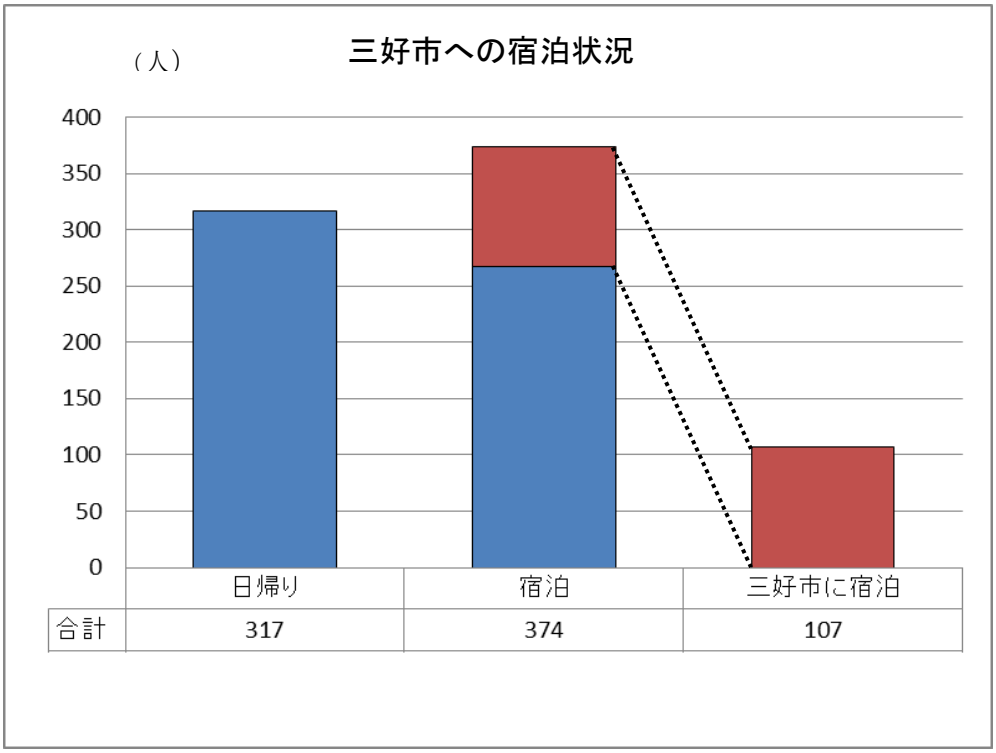
観光客の目的の観光アクティビティは自然景観が最も多くなっている。

・観光客が参考にした観光情報



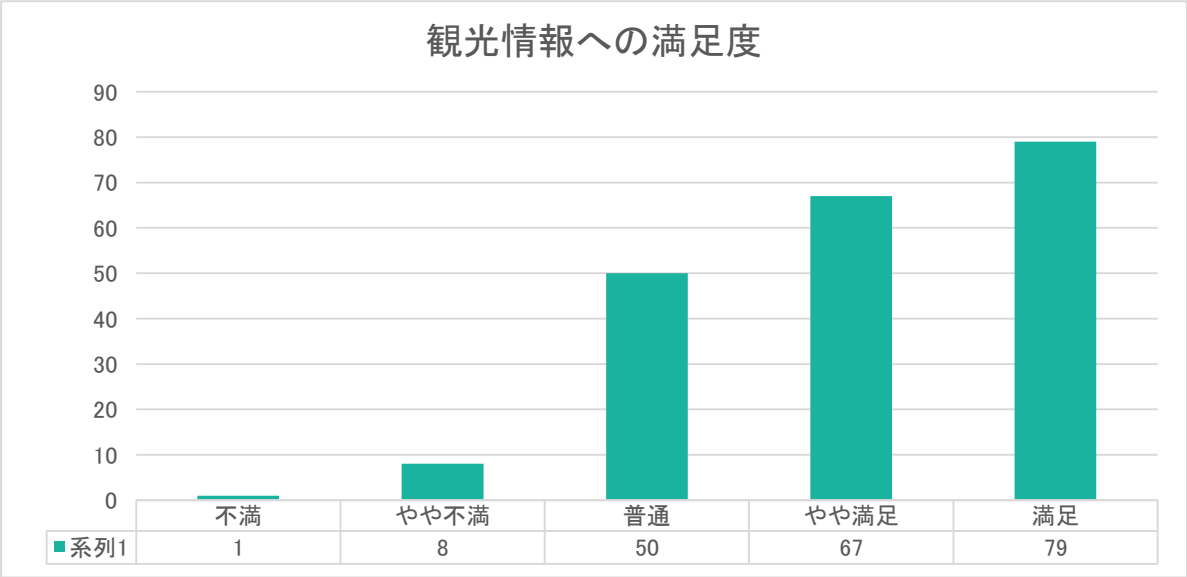
旅行中に参考にした観光情報は友人・知人・家族の情報が最も多くなっている。

・観光客は三好市で宿泊したのか



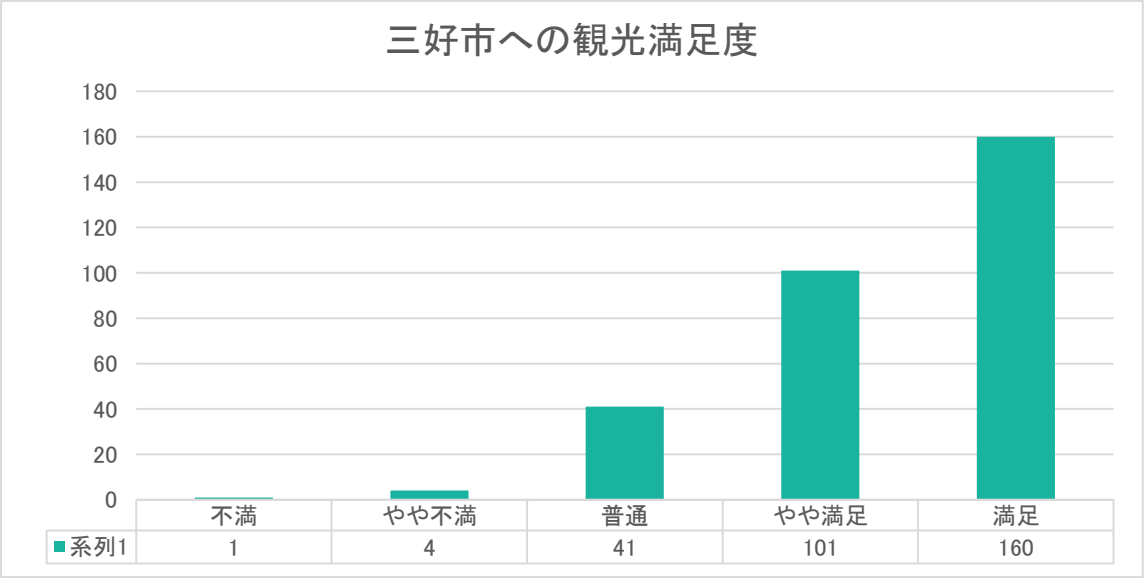
三好市に宿泊する観光客は少ないことが確認される。

・観光客の観光情報への満足度について



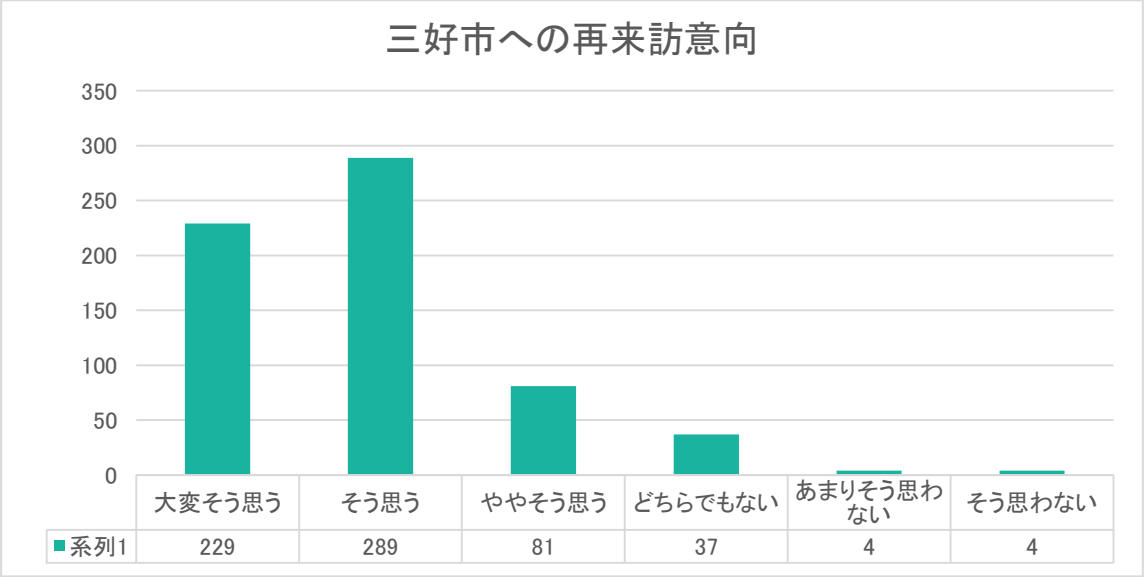
三好市の観光情報への満足度は高い傾向にあることがわかる。

・観光客の三好市観光への満足度について



三好市の観光への満足度は高い傾向にあることがわかる。

・観光客の三好市への再来訪意向について



三好市への再来訪意向は高い傾向にあることがわかる。

第3章　三好市における観光政策の課題

本章の概要：

本章では三好市の観光政策の課題を整理する。三好市における観光の課題の多くは、地方が観光振興に取り組む際の共通の課題に起因している。つまり、人口減少(及びそれに付随する労働人口の減少)や、地域経済の衰退による2次交通の脆弱化、地域への再投資が行われないことによる各種ハード設備の老朽化である。これらは観光政策独自の課題というよりも、「人口減少が引き起こす地域全体の課題」が観光政策にも影響を及ぼしていると考えることができる。よって本章では、現在三好市で起きている「人口減少が引き起こす地域全体の課題」について言及する。第4章ではこうした「人口減少が引き起こす地域全体の課題」を、観光政策によりいかに解決していくのかを示す。

3-1 三好市の観光政策の課題

三好市の観光政策の課題を考える上で重要なのは、何が「課題」であるのか、を定義することである。本計画では、「三好市の観光政策の課題」を以下と定義する。本章で挙げる課題はいずれも、これらのいずれかの事項に該当するものである。

「三好市の観光政策の課題」の定義
定義1.観光客数を低めている、もしくは観光消費単価を低めている事項
定義2.観光政策の効果が、地域全体に発現することを妨げている事項
定義3.観光政策の効果による持続可能な地域社会の実現を妨げている事項

以下、三好市の観光政策の課題を列挙するが、上記3つの事項とどの様に関連しているのかを明記する。なお下記課題は、観光関連事業者・行政関係者へのヒアリングによって把握されたものである。

三好市観光の課題

①.観光客に関する課題

・通過型観光が主流である観光動態(宿泊滞在型の観光が主流ではない)。

→四国の観光動態の大きな特徴として宿泊先は「高松市」「松山市」等に集中する傾向がある。こうした傾向から、三好市に宿泊する観光動態が一般的であるとは言えず、通過型観光が主流である。こうした通過型観光は、宿泊滞在型の観光と比較し、域内における滞在時間が短くなる。滞在時間が短くなることは、単純に宿泊や食事の回数を減らすことになるので三好市への観光消費額を低める(「定義1.」に該当)。

・観光客が市内を周遊していない(観光客の多くは大歩危・祖谷の一部に偏在)。
→前述の様に通過型観光が主流であるので、三好市における滞在時間は必然的に短くなる。この短い滞在時間の中で、観光客は「大歩危・祖谷周辺」に集中している傾向が見られる。こうした三好市内を周遊しない観光動態は、滞在時間を短縮させるだけでなく、観光客の観光消費行動が市内の特定の地域でしか行われないこととなる(「定義 1.」「定義 2.」に該当)。

・お土産品等の認知不足により、消費単価(特にお土産品等)が低い。
→通過型観光であること、市内周遊を行わないこと以外にも、三好市のお土産といえば○○といった、観光客の定番のお土産品が他地域と比べ少なくなっている。これは近年の、特に国内観光客の観光動態としてお土産品を購入する習慣の変化(職場の同僚に一気にお土産を配布する習慣の変化、等)や、また三好市が四国の中心に位置していることも影響している(お土産品は、旅の出口にて購入する傾向がある)。こうした傾向があるにしても、魅力的なお土産品を三好市として作り上げてこなかったことも事実であり、今後の重要な課題である(「定義 1.」に該当)。

②.実施体制側(三好市/及び観光関連主体)の課題
ソフトに関する課題
・政策のグランドデザイン[5]の不在
→本市はこれまで、多くの他の市町村と同様に、観光客の誘客に向けた観光政策を展開してきた。特に本市独自の地域資源を活用した誘客施策や、宣伝・PR、また環境整備、更に「にし阿波観光圏」事業とも連携した周辺エリア全体の誘客に尽力してきた経緯がある。しかし、本市として観光政策として目指すべき姿を明示し、市内の各種ステークホルダー[6]を牽引してきたとは言えず、一般的な誘客施策に終始してきた経緯がある。こうした誘客施策の実施は一定の成果をもたらしたものの、これから本市の観光政策が目指すべきものは何か、そのために何が必要なのか、こうした発想が今後の観光政策には必要となることを、自省を込め主張したい(「定義 2.」「定義 3.」に該当)。
　本計画はこの様な自省に基づき計画された観光政策のグランドデザインである。本市の観光政策が目指すべきものは何か、コンセプトは何か、そのために計画に何が必要なのか、本計画の第 4 章で明示される。

[5] 全体構想を意味する。
[6] 利害関係者のこと。

・人材不足（サービス業における労働力不足・地域の事業の担い手不足）
→特に飲食・宿泊事業における人手不足が顕著である。また観光以外の産業においても、地域の後継者不足等による事業承継が課題となっている。こうした人材不足は、三好市の観光産業における機会損失を生むことから重大な課題である（「定義 1.」に該当）。

・観光振興専門人材不足（行政）
→行政組織の構造上、一定の年数が過ぎると人事異動によって所属する部、及び職務が変更される。こうした仕組みは、三好市に限ったものではないが、行政担当者に蓄積された観光振興に関するノウハウが失われることとなる。行政側のこうした課題も、観光政策の課題として捉える（「定義 3.」に該当）。

・観光人材不足（民間事業者・関連団体）
→観光事業の担い手となる次世代の人材や、観光をテーマにした事業創造を行うアントレプレナー[7]が不足しており、三好市の観光産業に機会損失が発生している（「定義 1.」「定義 3.」に該当）。
　現在、三好市を訪れている観光客の購買力を、新しいビジネスシーズとして捉え、新規事業を展開する主体が増えれば、それは観光客へのサービス拡充にもつながり、より高い観光による経済効果を地域が享受することが出来る。現状では、観光産業に関連しない地域の民間事業者は、観光政策は自らの事業とは関係のないところで起きている施策と考えている傾向にあり、地域の民間事業者に、観光はビジネスチャンスであると認識してもらうことが重要となる。

・高付加価値型の財・サービスの開発不足等
→吉野川のアクティビティや、古民家宿の整備など、四国内の他地域に比べいわゆるインバウンド富裕層が楽しめるサービスは揃っているが、更に消費単価を高める仕組みが構築できていない。例えば、海外富裕層はフィランソロフィー[8]やアートに高い関心があり、特に三好市の地域特性を活用すればインバウンド富裕層向けのフィランソロフィーの仕組みを構築することは難しくないはずである。こうしたターゲットの定めが、高付加価値型の財・サービス・仕組みづくりが不足している（「定義 1.」に該当）。これは上記の人材不足とも関連する。

[7] 起業家を意味する。
[8] 利他的な活動。ボランティアや寄付活動。

・地域住民の意識
→上記における観光客の「大歩危・祖谷周辺」への集中は、それ以外の地域の地域住民の意識にも影響を及ぼしている。つまり、「大歩危・祖谷」地域以外の住民の観光政策への関心が低い傾向がある。もちろん地域活性化に向けて活動しているグループは数多く存在し、こうしたグループの活動は地域活性化に一役買っていることは疑いようがないが、上記「**①.観光客に関する課題・観光客が市内を周遊していない(観光客の多くは大歩危・祖谷の一部に偏在)**」の解決に取り組む場合、地域を超えた住民同士の連携や取り組みも必要になる可能性があり、三好市地域全体でのおもてなしの体制を構築するには、地域住民にとっても観光振興は地域の活性化に繋がる重要な政策であることを意識してもらうことが必要である(**「定義 2.」に該当**)。

ハードに関する課題
・2 次交通網の不備
→2 次交通網の不備によって本市内の周遊が妨げられている。観光客の利便性を高めるためには、2 次交通網の整備が必要不可欠である。但し、こうした 2 次交通網は本来、地域住民向けのサービスである。よってこうした 2 次交通網の不備は、観光政策の課題だけでなく、地域住民の交通手段の確保という問題とリンクしている。更にこうした交通手段の確保という問題も、地域の高齢化や人口減少という課題から引き起こされているものである。詳細は第 4 章にて記述するが、この様に「観光政策の課題」と「地域の課題」が、重なっている事項は非常に重要である。

・空き家などの増加による、景観の悪化
→主要な道路等に面している廃屋などは、著しく景観を悪化させている。こうした廃屋などは、景観の悪化だけでなく、倒壊などの危険性もはらむことから早急の対応が必要である。この課題も、人口減少や高齢化によって引き起こされている課題であり、「観光政策の課題」と「地域の課題」が、重なっている事項である。

・インバウンド観光客の受け入れ体制不足、等
→HP やパンフレット等は多言語化が実現されているが、キャッシュレス環境や、多言語サイン、Wifi 環境等においてまだ改善の余地が多くある。特に大歩危駅における両替機の設置など、実際の観光客のニーズに沿った改善が必要である。

3-2 三好市観光の現状分析(SWOT分析)

「脅威」を踏まえながら「機会」を的確に掴み「強み」を活かし、「弱み」を克服していく施策が必要となる。しかし、何のための施策なのか？(一体何を達成したいのか？)、これを明確化できなければ、施策の明確化は不可能である。そこで本項ではまず、三好観光の現状を整理するだけにとどめ、次章でそれらをどの様に活用していくのかを整理する。

強み(Strength)：

・温泉関係の地域資源群
・活発な活動を行う住民団体の存在(大歩危駅前、山城・あるせ、都築商店、等々)
・祖谷そば、でこまわしなどの伝統料理
・アレックスカーの著作による知名度・インバウンド観光取り組み先進地としての知名度・立地(四国の中心であり、4 県からアクセスが容易)
・1 次交通のアクセス性(JR)
・吉野川、剣山に代表される自然資源
・豊富な文化人類学的テーマ(妖怪伝説・古民家・独自の文化等)
・世界農業遺産に認定された傾斜地農業・林業・ウォータースポーツ
・民間事業者の取り組み(「大歩危・祖谷行ってみる会」等)、等々
・観光施策推進体制(観光圏、DMO の存在、等)

弱み(Weakness)：

・二次交通網・人口減少による観光人材の不足、事業の担い手不足
・インバウンド観光客の受け入れ体制・三好市市内を周遊させる仕組み不足
・観光のグランドデザインの不在・観光専門人材の不足(行政)
・メディアの活用の戦略性の不足と、情報発信力の不足

機会(Opportunities)

・世界の観光市場の成長
・世界の観光市場における、日本のプレゼンス向上
・観光立国としての政策推進
・日本開催予定の各種 MICE(東京オリンピック、パラリンピック、万博等)
・高齢者の増加による、アクティブシニア層の国内旅行需要の増大

脅威(Threats)

・日本全体の人口減少(国内観光市場の縮小)・世界の観光市場における競争の激化・自然災害の発生

第4章　三好市観光振興実現に向けたグランドデザイン

本章の概要：

本章では、本計画における**「三好市観光政策のグランドデザイン」**を提示する。このグランドデザインには以下が含まれる。

「三好市観光政策のグランドデザイン(三好市まるごと観光)」

本計画の位置付け

三好市における外貨獲得の基幹産業、かつあらゆる政策に横串を刺すリーディング産業

本計画の目的/本計画のKPI

「観光産業の発展(地域ブランド化と集客の実現、外貨の獲得)により、三好市の人口減少によって引き起こされる様々な地域課題を解決に導き、地域活性化を実現すること。この地域活性化には地域経済活性化や、地域コミュニティの再生やシビックプライドの醸成、豊かな歴史文化の保全や継承、自然環境の保全まで含んでいる」

バックキャスティング

本計画の戦略

戦略1.観光基盤整備　戦略2.観光消費額増加施策　戦略3.観光振興の効果発現のためのデザイン

三好市まるごと観光

「地域資源まるごと」「地域まるごと」「産業まるごと」「行政まるごと」「未来まるごと」

上記事項については詳細に解説していくが、こうしたグランドデザインを形容する文言として「**三好市まるごと観光**」がある。この「**三好市まるごと観光**」を本計画策定にあたり、改めて定義したい。

「三好市まるごと観光」の定義

「三好市まるごと観光」とは、本計画における「三好市観光政策のグランドデザイン」を形容する言葉である。

この「三好市観光政策のグランドデザイン」の基本的な方向性は地域ブランドの確立による「住んでよし訪れてよしの観光地域づくり」である。これを達成するために新たな視点から、三好市の観光振興に向けた施策の方向性を更に「まるごと」をキーワードに再解釈したものが「三好市まるごと観光」である。

具体的には以下の意味が含まれている。逆に言えば、「三好市観光政策のグランドデザイン」は、以下の各種まるごとを実現するための計画であると言える。

・地域資源「まるごと」
→本市に多く点在する様々な地域資源を全て、観光資源として活用していく。世界農業遺産にも認定された急傾斜地での暮らしやアウトドアスポーツとの連携による体験型観光、歴史・文化資源の残るまち並み歩きや、何気ない街並みなども含め、これらの資源をジオパーク活動の推進を通じてブランド化し、全てをまるごと観光資源として活用していくことを意味している。

・地域「まるごと」
→課題でも指摘した「大歩危・祖谷」地域における観光客の集中している状況を、他地域訪問の観光動機を創出していくことで、三好市全体が観光振興に取り組む状況を実現することを意味している。

・産業「まるごと」
→観光消費による地域経済活性化の効果を、地域の様々な産業に波及させていくために、観光関連産業だけでなく多くの地場産業と観光を関連づけていくのか、その効果を地域の産業全体で享受することを意味している。

・行政「まるごと」
→これまでの縦割り行政を打破し、部署間連携によって観光(そして関連する地域の諸課題)を共に解決に導く体制の実現を意味している。

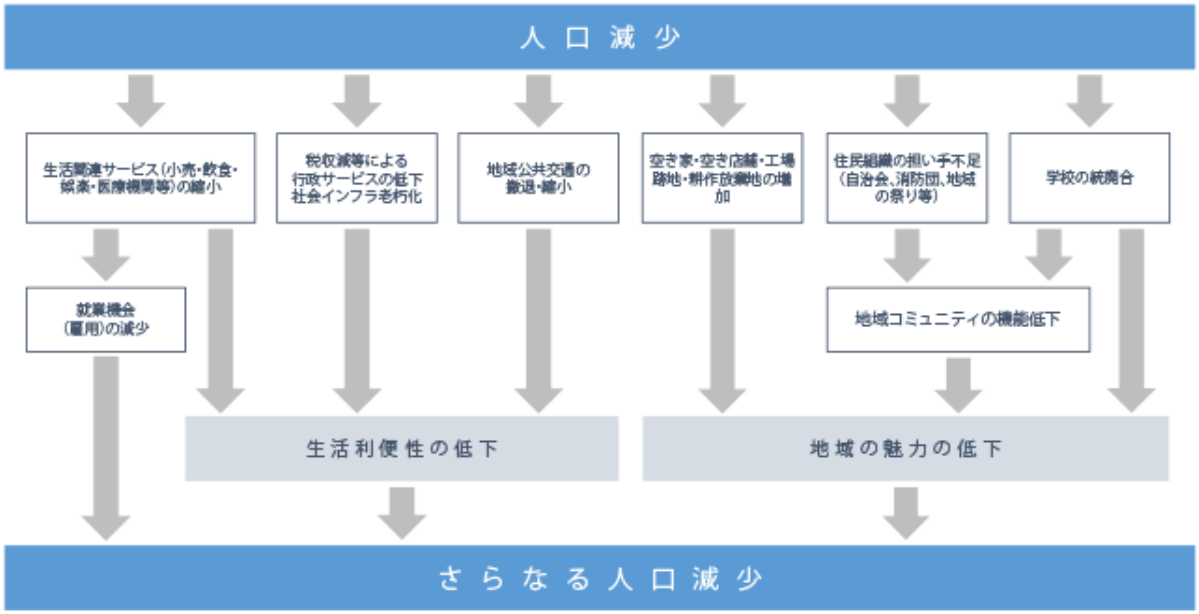
・未来「まるごと」
→現在だけでなく、持続可能な観光開発・観光振興を目指すことを意味している。特に自然に関する資源は本市の重要な観光資源であることから、こうした資源の保全を実現し、未来まで続く三好市観光振興の実現を意味している。

4-1 「三好市観光政策のグランドデザイン(三好市まるごと観光)」

・本計画の位置付け

前章にて整理した地域の課題のいくつかは、地域の人口減少によって引き起こされていると考えることができる。こうした地域の人口減少は、今後地域に様々な課題を引き起こすことが予想される。こうした事態が進行していくことは、地域経済の基盤を揺るがし、結果として地域の観光産業へも打撃を与えることとなる。更にこうした課題は、さらなる人口減少を引き起こしていく（下記図参照)。つまり対策を講じなければ、人口減少は加速度的に進んでいく。

人口減少への対応策は、観光振興だけではないが、大規模な設備投資を必要とせず戦略的で有効的なソフト施策の立案、そして実施体制の整備により遂行可能な観光施策への取り組みは、本市でも十分に実施可能性がある。そこで本市の人口減少への有力な対応策として「観光振興」を「今後の三好市のリーディング産業・外貨獲得の基幹産業」と位置付け、三好市における地方創生としての重要な手段として定義づける。三好市において観光振興は観光客を集客することが目的ではなく、「人口減少という地域の課題に打ち勝っていく手段」とする。行政計画の関係上の位置付けでは、本計画は「三好市総合計画」の下位計画である。しかし、観光振興は三好市にとって重要な外貨獲得手段であり、かつ地域活性化の中でも重要度の高い施策である。そこで三好市における市政に従事する者の共通認識として、**「今後の三好市の外貨獲得の基幹産業であり、あらゆる政策に横串を刺すリーディング産業[9]」**と位置付ける。



資料）国土交通省

[9] 主幹産業を意味する。

・本計画の目的

「観光産業の発展(地域ブランド化と集客の実現、外貨の獲得)により、三好市の人口減少によって引き起こされる様々な地域課題を解決に導き、地域活性化を実現すること。この地域活性化には地域経済活性化や、地域コミュニティの再生やシビックプライドの醸成、豊かな歴史文化の保全や継承、自然環境の保全まで含んでいる」

解説：前段にて、観光産業は三好市の外貨獲得の基幹産業であり、あらゆる政策に横串を刺すリーディング産業として定義づけた。この定義によって、三好市の観光産業は、地域活性化の中心的な役割を果たすことが明言された形となる。この観光産業の発展は、地域内外に向けた地域ブランド化の実現、それによる観光客の集客の実現、集客の実現による外貨の獲得を意味している。ここから更に、本計画の目的として、「経済活性化だけでない(つまり経済的な価値尺度で測れない)、様々な観光振興による効果」を実現することによって、持続可能な地域活性化を達成することを明確化している。この「経済活性化だけでない(つまり経済的な価値尺度で測れない)、様々な観光振興による効果」には、衰退している地域コミュニティの再生や、地域住民のシビックプライドの醸成、三好市の豊かな歴史や文化の保存や継承、重要な観光資源である自然環境の保全など、多岐に渡る。

以上が本計画の目的である。この目的を達成するために「バックキャスティング」によって施策を導出する。施策を導出するためにはまずこの計画を、定量的に把握できるKPIに落とし込まなくてはいけない。更にこのKPIの数値を達成するための施策を戦略によって分類する。

・KPI/及びターゲットの設定
観光関連分野に関する KPI

KPI1. 延べ宿泊者数

	2020	2021	2022	2023	2024
日本人	136,470 人	136,470 人	136,470 人	136,470 人	136,470 人
外国人	28,350 人	29,700 人	31,500 人	33,750 人	33,750 人

導出方法
→観光圏の数値をベースに、外国人観光客の 9 割を三好市で達成する目標とともに、過去 5 年間の三好市日本人平均延べ宿泊者数の 1.1 倍を達成する計算により算出した。

KPI2. 1 人当たりの観光消費額

	2020	2021	2022	2023	2024
日本人	29,810 円	30,140 円	30,470 円	33,550 円	33,550 円
外国人	44,000 円	45,100 円	46,200 円	47,300 円	47,300 円

導出方法
→観光圏の数値をベースに、三好市独自の政策目標として、1.1 倍の観光消費額を目的として設定した。

KPI3. 来訪者満足度

	2020	2021	2022	2023	2024
日本人	26.7%	27.5%	27.5%	27.5%	27.5%
外国人	23.9%	25.7%	27.5%	27.5%	27.5%

導出方法
→観光圏の数値をベースに、三好市独自の政策目標として、1.1 倍の数値を目的として設定した。

KPI4. リピーター率

	2020	2021	2022	2023	2024
日本人	64%	65.1%	65.1%	65.1%	65.1%
外国人	8.4%	9.4%	10.5%	10.5%	10.5%

導出方法
→観光圏の数値をベースに、三好市独自の政策目標として、1.05 倍の数値を目的として設定した。

観光関連分野以外の KPI
KPI1.(雇用の場の創出)：観光関係の創業・起業：2 件(5 年間)
KPI2.(産業の担い手育成支援):観光関係の就労のための UIJ ターン就職者数:2 件(年間)
KPI3.(地域資源を活かしたモノづくり推進)：新たな特産品開発件数：1 件(年間)

解説：「観光関連分野に関する KPI」は一般的な観光計画にかかる KPI である。後述のターゲットも同様であるが、基本的に「にし阿波観光圏」の計画と連動している。これは、全く別のロジックから KPI を算出することが二度手間となることや、「にし阿波観光圏」事業との整合性、相乗効果を狙ったものである。この KPI 設定で特徴的なのは、「観光関連分野以外の KPI」を設定していることである。つまり、観光振興を通じて、他部署の行政計画の KPI である事業の創出、移住者、特産品開発等を達成していくことを目的にしているのである。これこそが、「三好市まるごと観光：行政まるごと」を KPI によって表現したものである。

・ターゲット

ターゲットに関しては相乗効果を狙い大枠では「にし阿波～剣山・吉野川観光圏整備計画」と同一ターゲットとするが、三好市独自のターゲットの設定も行う。

ターゲット 1. 欧米豪・アジアからのインバウンド

「にし阿波～剣山・吉野川観光圏整備計画」におけるターゲット設定：日本の歴史や文化に基づいたストーリーに興味を持ち、旅行での一人あたり平均消費額が高いとされる欧米豪の富裕層、大自然や原風景に興味をもつアジア諸国の中間層へのターゲットに、戦略を立てて市場開拓します。

→本計画では更に、歴史・文化・自然への関心が高い富裕層の中のグループである、知的好奇心の高いインテリ層をターゲットとする。このターゲットのニーズを充足する知的コンテンツ開発に取り組む。

ターゲット 2. 自然を体験する機会が少ない大都市圏住民

「にし阿波～剣山・吉野川観光圏整備計画」におけるターゲット設定：現状において、近畿地方と関東地方の来訪者を合わせると全体の過半数を占める客層であることから、圏域の豊かな自然を楽しむ滞在プログラム、山や川でのアクティビティ、古民家ステイ等により、日常生活では味わえない、大自然の中でのリラックス効果を期待する都市部住民の誘客に取り組みます。

→本計画では更に、大都市圏住民の中でも、大自然を活かした教育をテーマにしたファミリー層をターゲットとする。こうしたファミリー層が泊りがけで体験できる体験型・学習型のコンテンツ開発に取り組む。また、大都市の健康意識の高い富裕層や健康経営を目指す企業並びに自然、健康、体づくりに関心の高い女性を中心した層についてもターゲットとし、体験コンテンツやメソッドの開発、イベント等の実施を行う。

ターゲット 3. 中高年層

「にし阿波～剣山・吉野川観光圏整備計画」におけるターゲット設定：現状で来訪が最も多い 60 代男性の誘客を更に進めるため、歴史文化、伝説伝承を探求したい中高年層をターゲットとした滞在プログラムの開発を進めます。

→本計画では更に、生涯活躍のまち基本計画の 40 代以上（５０代シニア層を中心）もターゲットとし、こうした知的好奇心の高い中高年層が長期滞在出来る農業体験プログラムや、田舎暮らし体験、といった移住にも結びつくコンテンツ開発に取り組む（観光振興と、移住・定住促進の相乗効果を狙う）。

4-2「KPI達成のための戦略」

戦略は以下の３つに分割される。「戦略 1.観光基盤整備」は受け入れ環境も含めた、地域での環境整備についての施策の列記である。「戦略 2.観光消費額増加」は、誘客を実現するための施策の列記である。「戦略 3.観光振興の効果発現のためのデザイン」とは、観光振興の目的である地域活性化の効果をいかに創出するための施策の列記である。従来の行政の観光振興計画は、「戦略 1.観光基盤整備」「戦略 2. 観光消費額増加」までに該当する。本計画の新規性は、その先にどの様に地域課題を解決するのか、までを計画に含めることにある。以下ではこれらについて詳細を解説していく。

戦略 1.観光基盤整備

観光基盤整備は、地域のリーディング産業としての観光産業を効果的に機能させるために必須事項である。なぜならハード・ソフトにおいて受け入れ環境の基盤が脆弱であれば、あらゆる観光政策の効果が弱まってしまうからである。また特にハード面における観光基盤整備は、観光だけでなく地域の課題解決と連動するケースがある(2次交通対策や景観整備など)。

以上から、「戦略 1.観光基盤整備」は、この戦略単体で誘客を実現するものではないが、「戦略 2.観光消費額増加」に向けて重要な意味を持つ。

戦略 1-1.ハード環境整備

・交通インフラ整備

→三好市内の交通環境の整備を行う。特に市内周遊を妨げている 2 次交通への課題対応を行う。具体的には後述の観光客アンケート調査等で、特に観光客にとって課題となっているルート等を把握し、対応を行う。こうした課題への対応策として、地域の交通困難者への対応も配慮したハイブリッドな施策として実施する。

・景観整備(空き家対策、等)

→公道に面している廃屋等は、著しく景観を損ねる場合がある。こうした空き家等の整備や、観光振興に向けた利活用を庁内連携により進めていく。またリノベーション[10]物件としての活用や、移住定住者向けのレジデンスとしての整備、ゲストハウスとしての活用等、観光振興における定住人口・関係人口創出につながる施策も検討する。

[10] 建物などの修繕を意味している。

・(民間企業と連携した)公共空間活用
→三好市では、廃校となった小学校が廃校活用により新たな観光資源として蘇っている事例がある。こうした廃校などの、遊休化している公的な資本ストックを、今後も積極的に有効活用を行う。三好市内に遊休化している資本ストックを網羅的に整理し、観光振興へ供する可能性を検討する。特に、全国的に官民連携によって、民間事業者の活用した公共空間活用のトレンドが進んでいる。本市においても、庁内連携によってこうした利活用を積極的に進めていく。

・インバウンド観光客受け入れ環境整備
→インバウンド観光客受け入れ環境の整備に関しては、現在すでに進んでいる部分もあるが(多言語表記や多言語パンフレット、等)、今後更なる誘客を見越して導入を進めるべき環境整備も多い。顕著な例が「キャッシュレス環境整備」である。今後、日本でもキャッシュレス環境化が進んだ場合、これは日本人観光客向けの施策ともなる。また、外国人宿泊施設における修繕・整備の支援等の実施や官民連携による滞在拠点施設整備等の検討を行う。

・バリアフリー、ユニバーサルデザイン
→今後、人口減少により減少が予想される国内旅行客への対応として、マイノリティ[11]へ配慮したおもてなし体制の構築は1つの有効な手段となる。体に障がいを持っている方などに向けたユニバーサルなデザインの観光施設の設計や、既存施設の改修などを、今後のハード整備の際に検討する重要な要素とする。

・自然環境に配慮した観光施設整備の推進
→周辺住民や観光客からの意見を取り入れ、祖谷のかずら橋周辺修景整備計画の検討など、本市の魅力である自然景観の保全と景観に配慮した施設の整備を推進する。

戦略 1-2. ソフト環境整備

・おもてなし環境の構築
→地域全体で観光客を受け入れる環境を構築する。具体的には宿泊事業者や飲食事業者に向けた、特にインバウンド観光客の接遇に関するセミナーの開催等を実施していく。こうしたおもてなし環境の整備によって、観光関連事業者に向けた意識醸成を図る。また、各種研修会などを開催し「おもてなし」の心を育む「人づくり」に取り組む。これは三好市内に向けたインナープロモーション[12]である。

[11] 少数派のこと。この文脈では、障がいを持っている方などを意味している。
[12] 組織外部ではなく、組織内部に向けた周知活動。

・有償ボランティアガイドの養成
→本市の魅力である地域の資源や景観が育まれてきた過程、人の営み、地域との結びつきなどを説明する地域ガイドについて、ジオパーク・世界農業遺産の取り組みと連携し育成する。特に、現状で各地域に点在しているボランティア団体同士の連携や、支援によって、自律的に地域のガイドが養成されていく仕組みづくりを支援する。また、こうした地域のガイドの養成の先には、専門人材として職業人としてのガイドが生計を立てられる環境を整備する。

・次世代に向けた観光教育の実施
→観光振興が地域住民のシビックプライドを醸成することはもちろん、地域の次世代の子どもたちが就職の際の選択肢として三好市の観光産業が有益な選択肢に入ってくるように、地域の小中学生・高校生に向けた観光教育の展開を推進する。

・インナーブランディング[13]の実施
→地域外だけでなく、地域内にも向けても本市における「観光産業をリーディング産業としての位置付け」や、「観光振興の重要性や地域経済への効果」の重要性を認識してもらうような情報発信等を検討する。今後は、外部に向けた地域ブランディングだけでなく、地域内に向けたブランディング活動も重要視していく。

・災害時等の危機管理対応
→三好市を訪れる観光客に向けた危機管理対応の整備が必要である。特に本市は地震や豪雨時による崖崩れや洪水などの災害が想定され、災害時における危機管理への統一的なマニュアル整備は必要不可欠である。今後こうした観光危機管理体制の構築を重要な課題とし、「受け入れ態勢側の対応マニュアル」と「観光客に向けた危機対応マニュアル(多言語での整備)」の作成に向けて具体的に検討を行う。こうした対応は行政組織内での、連携による対応が必要不可欠となることから、異なる部署同士が情報交換を積極的に行い、対応を講じていく。

戦略 1-3. 観光推進体制の整備

・観光人材育成
→観光振興の推進には、地域の観光を牽引するマネジメント能力や観光マーケティング能力を持ったリーダーの育成や、観光関連事業での起業を行う起業家などの存在が不可欠である。こうした観光関連人材の育成に取り組む。

[13] 組織内部に向けたブランディング活動。

・近隣組織との連携
→三好市近隣の観光への取り組み、具体的には観光圏事業やDMOと観光関連施策の企画面、実施面、検証面など各フェーズにおいて連携を強化する。

・四国近隣における観光組織との連携(自治体・DMO等)
→近年の観光立国の取り組みによって、また観光による地方創生の推進によって四国周辺には多くの観光組織が点在している。こうした観光組織との効果的な連携により、集客拡大に取り組む。

・地域の活動支援
→三好市には各地域に住民が地域活性化のための活動を展開している(大歩危駅前・阿波川口駅周辺や、祖谷等)。こうした地域の活動の継続を支援しつつ、各種活動の集客のコンテンツとしての協力を検討する。

・観光事業創出に向けた取り組み
→三好市における観光関連事業者同士の交流会の実施や、住民に向けた着地型観光旅行商品造成のワークショップの実施等、地域から観光に関する施策が立ち上がる環境を整備します。

・ワンストップ窓口機能の充実
→観光案内所、道の駅、地域連携DMO「（一社）そらの郷」などとの連携によるワンストップ窓口機能の充実を図り、観光客が快適かつ安心して周遊・滞在できるための受入環境整備に取り組む。

・観光実施主体、広域観光ネットワークの充実
→観光振興に向けた体制づくりのため、官民連携（県、観光協会、商工団体など）を促進する。特に観光推進体制は重要である。「にし阿波～剣山・吉野川観光圏」、および「DMOそらの郷」とも連動しつつ、三好市全体の観光振興に主体的に取り組む組織や各地域との役割分担が必要となる。更に広域観光周遊ルート形成において「美の伝説」「せとうち・海の道」「スピリチュアルな島～四国遍路～」と連携した事業を展開していく。いずれにしても現状の観光客の移動動態に即した効果的、効率的な連携を展開する。

戦略2.観光消費額増加施策

観光消費額増加は、本計画において最も重要な部分である。なぜなら、こうした視点を欠いたままではいくら誘客を実現しても、地域における経済効果が小さく、観光による経済活性化効果が期待できないからである。この「戦略2.観光消費額増加施策」

は以下のいずれかの変数を増加させることが目的である(これらの変数の増加を通じて、KPI を達成し、本計画の目的を達成する)。以下では三好市観光をテーマごとに戦略と称し細分化するが、こうした細分化されたテーマ別観光体験が増えれば増えるほど、三好市訪問者数増加や滞在延長にダイレクトにつながっていく。

観光消費額=観光客数×観光消費単価

・観光客数=国内日帰り観光客+国内宿泊観光客+日帰りインバウンド観光客
+宿泊インバウンド観光客

・観光消費額単価=観光消費額(宿泊の有無・市内滞在時間・購入する財・サービス)

解説:観光消費額は観光客数と可能消費単価の積である。観光客は国内日帰り観光客、国内宿泊観光客、日帰りインバウンド観光客、宿泊インバウンド観光客のいずれかである。また観光消費単価には色々な要素が関係するが、ここでは簡略化して、三好市市内に宿泊するのか、市内滞在時間はどれくらいなのか、財・サービスを購入するのか、を主要な要素とする。宿泊を促す、滞在時間を促す、購買を促す、施策はいずれも観光消費単価を増加させ、観光消費額を増加させる効果を持つと考える。こうした観光消費額を増加させるための各施策は、これらの総体として「三好市の地域ブランディング」を目指すことである。魅力ある観光地(自然・歴史・文化・食)としての三好市のブランディング、これのための地域における環境整備や施策の展開、及びブランド形成を狙った情報発信の展開こそが「**戦略 2.観光消費額増加施策**」である。つまり観光消費額を増加させるためには、三好市観光において他の観光地とは異なる価値を消費者に感じ取ってもらう必要があり、これこそが地域ブランディングの要諦となる。以下の戦略の全てには、この地域ブランディングの考え方に基づいている。すなわち戦略 2 とは、観光における三好市ブランドの形成を目指すものである。単なる情報発信によるブランディングではなく、様々な施策によって三好市観光の価値を創出、これを地域ブランディングにつなげていくことを目指す。

戦略 2-1.マーケティング・リサーチの展開

期待される効果:直ちに観光消費額を増加させる効果はないが、あらゆる施策立案に向けた基礎的施策である。

→観光客が何を求めているのか、三好市観光にどのような感想を持ったのか、こうした情報は施策の立案段階、施策の検証段階において必須の情報となるマーケティング情報である。今後は三好市として、こうした観光マーケティング情報の一次情報取得を試みる。こうして得られたデータは市内関係者に適宜共有し、地域全体での観光推進の機運醸成を図る。また、三好市内では、類似した観光調査を異なる主体のレイヤー(県庁・にし阿波観光圏・三好市)などで同時期に実施している実態が見られるので、

関係組織との情報共有の強化や、効果的効率的な情報取得体制の構築などを検討していく。これは三好市の地域ブランディングに向けた施策を検討するために必要な情報収集であると言える。

戦略 2-2. 食の魅力創出

期待される効果：日本人観光客・インバウンド観光客のいずれもその地域でしか食べられない食は、観光客の目的の一つとなる。よって観光客数を増加させる効果がある。また飲食サービスの購買、お土産品の購入にもつながることから、観光消費単価も増加させる効果がある。2 重の意味で観光消費額を増加させる。

→三好市の食材を生かした新しい食の魅力の創出を目指し、以下に取り組む。

・宿泊施設や飲食施設との連携で、三好市の旬のものを旬の時期に食べられるようにしたり、地元独特の食材の食べ方を観光客への提供。また、インバウンド観光客向けのメニューや解説の付与を行う。

・「さるなし」などの地域産品を使ったお土産品や観光資源と関連づけたストーリー付けによる付加価値の高い商品の開発、及びブランド化に取り組む(所管課との連携)。

・「ジビエ(鹿肉・猪肉)」などを活用した料理レシピの開発、及び関連事業者への提供、食材の流通システムの確立に取り組む(所管課との連携)。

・「ひらら焼き」など伝統料理を、伝統的な食べ方によって提供できる飲食店を増やす取り組みを行う。

・世界農業遺産認定を活用した飲食メニューの開発、飲食店などでの提供に取り組む。

・富裕層インバウンド観光客に向けた高級食材を利用した高単価の飲食メニューの開発に取り組む。

戦略 2-3. ジオ（地球・大地）を活用した自然および自然と歴史文化関係性を魅せる仕組みづくり

期待される効果：インバウンド観光客・日本人観光客のいずれも自然を活用したアクティビティや地域の歴史文化資源の個々に興味を抱いてきた傾向がある。このように、今までは自然と歴史文化は点の地域資源として掲示されてきたが、ジオ(地球・大地)を活用した地域資源同士の連動を魅せる仕組みづくりに取り組むことにより、大地から自然と生き物、そして歴史文化までまるごと体験できることが可能となる。これにより、当地域を初めて訪れるインバウンド観光客・日本人観光客だけでなく、今までに訪れたことのある観光客にとっても、三好市ならではのより深みのある地域資源を紹介できることとなる。さらに、自然と歴史文化、地域間同士の資源の魅力掲示は住民同士の連携のもとに達成できるものであるため、地域住民の自然・文化に関しての再評価のきっかけにもなる。

川の活用

・「ウォータースポーツのまちづくり」の取り組みと連動し、観光とウォータースポーツ及びヒーリング事業者と連携した各種イベントの開催、観光拠点づくり、観光情報の発信など観光 PR の充実に努める。

・吉野川を活用したスポーツの魅力創出に取り組む。特に地域におけるラフティング事業者との連携による、川の魅力のブラッシュアップや情報発信等。

アウトドアスポーツ

・世界農業遺産にも認定された急傾斜地での暮らしやアウトドア及びヒーリングとの連携による体験型観光の推進を目指す。

・トレッキングコースの整備や MTB などのニュースポーツのアクティビティ開発も検討する。また、川と山を活用したアウトドアスポーツサイトの整備を行う。

林業の活用

・三好市の重要な産業である林業を活用した木に関するツーリズムプランの造成に取り組む。特に、三好市はウッドスタート宣言を行なっていることから、林野庁が進めている木育と関係付けた「木育ツーリズム」の推進などに取り組む(所管課との連携)。

・木材を活用したお土産品の開発などにも取り組む。

その他

・三好市におけるジオツーリズム創出に向けた取り組みを行う。具体的には三好市のジオガイドの育成による、ジオツーリズムの確立、また最終的に三好市のジオパーク認定を目指す。

・また、こうしたスポーツを中心にした誘客や MICE[14]開催に向け「スポーツコミッション[15]」の設立、運営にも取り組む。自然を活用した様々な MICE の誘致に向けた取り組みを実施していく。

---

[14] Meeting（会議・研修・セミナー）、Incentive tour（報奨・招待旅行）、Convention または Conference（大会・学会・国際会議）、Exhibition（展示会）の頭文字をとった造語で、ビジネストラベルの一つの形態。

[15] 地方公共団体とスポーツ団体，観光産業などの民間企業が一体となって組織される地域のスポーツ振興を担う組織。

戦略 2-4. 文化・歴史の魅力創出

期待される効果：インバウンド観光客・日本人観光客のいずれも地域の文化・歴史には高い興味を持つことから、観光消費額の増加に向けてこれらの資源を活用した施策の立案が必要である。また地域住民自身が、自らの地域の歴史や文化への再評価のきっかけにもなる。

・三好市内に点在する有形、無形の文化財を活用したツアーの企画等に取り組む(教育委員会との連携)。

・各地に残る伝承や伝説を、積極的に観光振興に活用していく(妖怪伝説、三好長慶武者行列まつり等)

・こうした文化・歴史の魅力を観光客へ伝えることができるガイドの養成に取り組む。ガイドを活用し、こうした文化・歴史の魅力を体験できるツアーなども積極的に造成し、販売を行う。

・放置されている古民家等の観光施策への活用を検討する。

※上記各施策は、エリアによって区分けすることができる。

三野町：農業、歴史、文化観光のエリア

池田町：産業観光・自然のアクティビティ、歴史、文化観光のエリア

山城町：自然観光・自然のアクティビティ、歴史・文化観光のエリア

井川町：自然観光・自然のアクティビティのエリア、歴史・文化観光のエリア

東祖谷：自然観光・歴史、文化観光のエリア

西祖谷山村：自然観光・自然のアクティビティ、歴史・文化観光のエリア

戦略 2-5. ナイトタイムエコノミー[16]の推進

期待される効果：観光消費額の増加、地域の観光地としての魅力の増加

・現在、観光客が夜間に楽しめるアクティビティやコンテンツが著しく少なく、夜間は宿泊施設から出ることがほぼない状況となっている。夜間は観光消費にとって重要な時間帯となることから、観光消費額の増加に向けては、こうしたナイトタイムエコノミーの推進が必要不可欠である。今後、観光客の誘客だけでなく、こうした機会損失をいかに回避していくのかという視点を重要視する。特に、ナイトタイムエコノミーは最重要課題として位置付け、その対応策を検討する。

戦略 2-6. 情報発信・営業の強化

期待される効果：魅力的な地域であっても知られていなくては誘客することが出来ない。的確な情報発信や、営業の展開は、観光客数の増加につながる。

[16] 観光客による夜間の消費活動のこと。

・市観光情報サイト（大歩危・祖谷観光 NAVI）等の効果的な活用を進める。また発展する ICT 技術の導入による三好市ガイドアプリのさらなる強化を図る。
・地域ブランドである「千年のかくれんぼ」のコンセプトの浸透と活用を通じて、ブランドコンセプトの確立と情報提供に努める。
・海外メディアや旅行業者を招へいするファムトリップや海外キャンペーンの実施など、海外への PR の強化を図り、新たなツアー造成へつなげる。
・来訪者による SNS などを活用した情報発信を促す取り組みを検討する。
・また上記の情報発信、PR、営業は前述のマーケティングリサーチで得られた情報をベースに、三好市へ誘客の可能性の高いターゲットを細部化し、こうしたターゲットにリーチする情報発信方法を企画、実施に取り組む。つまり総花的な情報発信ではなく、ターゲットを明確化した効果的な情報発信の実施に努める。
・以上の全ての情報発信を「**戦略 2-2.食の魅力創出**」「**戦略 2-3. ジオ（地球・大地を活用した自然および自然と歴史文化関係性を魅せる仕組みづくり**」「**戦略 2-4.文化・歴史の魅力創出**」とリンクさせ、統一的な地域のイメージを国内外に発信していく。こうしたイメージの総体として「三好市の地域ブランド」を確立していく。具体的にどの様な情報発信を実施するのか(誰をターゲットにして・どの様に展開するのか)は、戦術レベル決定していく必要があり、今後も継続的に検討すべき事項となる。

戦略 2-7.その他関係事項

・MICE の誘致を強化する。特に三好市における各観光地点の「ユニークベニュー[17]」として利活用の可能性を検証し、簡易的なイベントの実施から「ユニークベニュー」としての活用を開始する。こうした「ユニークベニュー」を活用したイベント企画を行える観光人材の育成に取り組む。
・三好市まるごと観光ガイド人材の育成に取り組む。上記の文化財ガイド、木育ガイド、ジオガイド、観光ガイド、世界農業遺産ガイド、食と農の景勝地ガイドなど何でもオールマイティにガイドできる人材を地元の女性や高齢者、やる気のある若者、事業社従業員で副業が可能な方など多く募り、ガイディングノウハウや旅程管理、添乗のノウハウを学び、それぞれのガイドができる知識を身につけ、汎用的にガイドできる人材を数多く登録しストックする。ガイドは有償にしてやる気と責任に応じた報酬を用意することにより、三好市観光の満足度を上げる組織と講習のシステムを構築する。
・上記各戦略を、現在観光客が多く集まっている「大歩危・祖谷周辺」以外の地域でも積極的に実践し、かつ三好市全体を回るツアーや、観光ルートを作成することによって三好市内全域を周遊し、三好市全体で観光消費が実現できる状態を目指す。このために、三好市各地域における地域住民団体や、取り組みとの連動を重視していく。

[17] MICE にて活用される特別な会場のこと。

戦略 3.観光振興の効果発現のためのデザイン

本計画の最も特徴的な戦略となる。上記の「戦略 2.観光消費額増加施策」が本計画の目的の一つである「地域経済活性化」に資するものであったとすれば、本戦略はこうした経済活性化やその他の目的である地域コミュニティの再生や、環境保全、歴史・文化の保全に取り組んでいくのかを明言するものである。本戦略は誘客の先にあるものを計画に織り込むという意味で新規性がある。

戦略 3-1.地域経済活性化に向けた外貨獲得の地域ビジネスモデルのデザイン(経済波及効果の最大化による、生活利便性の向上)

本戦略は、「2. 観光消費額増加施策」によって高められた観光消費の効果を、いかに地域全体に波及させるか、そして地域経済活性化に結びつけるか、についての施策である。

・地域全体を循環する観光産業クラスターの形成に向けた検討

→地域経済構造を把握し、三好市内における事業者の取引を増加させ(すなわち産業同士を連結させ)、観光消費による地域の経済波及効果を高める施策に取り組む。具体的には、祖谷や三野といった地域の農産品などを、大歩危・祖谷地域における宿泊事業者や飲食事業者などで原材料として使用することを実現する仕組みづくりなどである。

・雇用の創出に向けた取り組み

→観光関連事業では人手不足感があり、機会損失につながる恐れがある。三好市内の中高生に向けて、高校卒業後、または大学卒業後も三好市で働く意義や、観光関連事業の面白さを伝える活動を行うことによって、機会損失の防止や、人口の社会減少を食い止めることに取り組む。これは「観光業をリーディング産業としての位置付ける」という政策目標とも関連する。高校卒業時また大学卒業時に、三好市で就労することを考えた場合、観光産業があると認識してもらうことが、観光業における雇用創出と社会人口の減少に歯止めをかけることにつながる。

・域内に向けた再投資の活性化、地域外の民間企業の誘致

→観光振興によって得られた税収や関係団体の内部留保を、更なる観光政策(ソフト・ハード)に再投資していくための仕組みづくりや、増加する観光客を狙った地域外の民間企業の参入の促進など、地域経済活性化のために地域内産業の連関を高めつつも、市場自体を拡大させていくための地域外の民間活力の活用などを検討する。

この投資の受け入れについては、内資・外資に関わらずその投資のコンセプトが本地域の「地域ブランド」を損ねないかが最も重要な判断基準となる。経済活性化に結びつくことが必ずしも優先ではなく、重要なのは人口減少が引き起こす課題への対応

と、その結果実現される永続的な地域での豊かな暮らしの実現である(住んでよし・訪れてよしの地域づくり)。

戦略 3-2. 新しい「地域コミュニティ形成」に向けたデザイン(衰退する地域コミュニティ再生)

本戦略は、「戦略 2. 観光消費額増加施策(地域ブランディング)」によって実現する誘客の効果をどの様に地域に発現させていくかについての戦略となる。前項の戦略 3-1. は観光振興による経済的効果に着目した内容であった。本戦略は、観光振興によって「人が地域に来ることによる効果」に着目した内容となる。
一度訪問したことがある土地はそれがきっかけで定住・移住に結びつきやすい傾向がある。本戦略はこうした効果を狙ったものである。

・テーマ型コミュニティの創出に向けたイベント企画
→例えば毎年、隔年など定期的に、観光客と地域住民が交流できるイベントを企画することによって、定期的に三好市にやってくるリピーターを創出する。こうしたイベントの開催は「関係人口創出」につながり、更には「定住人口の増加」にも寄与する。
※テーマ型コミュニティとは、あるテーマによって形成されるスポット的なコミュニティである。例えば、いけだ阿波おどりや四国酒まつりなど毎年特定のお祭りによって地域内外から毎年同じ人々が集まり交流があればそれは「テーマ型コミュニティ」である。単なる観光客ではなく、こうしたテーマ性を持ったリピーターの集まりこそが「テーマ型コミュニティ」であると言える。単なる集客のためのイベントではなく、毎年来たくなる仕掛けや、また会いたくなる人々との出会いを演出することが「テーマ型コミュニティ創出に向けたイベント企画」である。

・移住者と観光客の交流の場の創出
→移住者と、観光客が交流できる交流イベントの企画することによって、都会にはない三好市の魅力を伝える場となる。こうしたイベントの開催は「関係人口創出」につながり、更には「定住人口の増加」にも寄与する。これは民泊や農泊の推進とも関連している。

戦略 3-3. 環境保全に向けた持続可能型の観光開発に向けたデザイン

本戦略は、「戦略 2. 観光消費額増加施策」によって実現する誘客の効果をどの様に環境保全につなげていくのかについての戦略となる。前項の戦略 3-1 は観光振興による経済的効果に着目した内容であった。本戦略は、観光振興によって「人が地域に来ることによる効果」に着目した内容となる。

・観光消費額の一部が環境保全につながる仕組みづくり
→例えば、前述の三好市の自然を活用したツアーの代金や、木材などを利用したお土産品の一部を、環境保全に使う仕組みが構築できれば、観光消費額の増加と連動して、環境保全も進む。こうした仕組みづくりの検討を行う。

・フィランソロフィーの仕組みづくり
→富裕層インバウンド観光客を対象に、環境保全用途のフィランソロフィー用の寄付口座や基金の設立などの仕組みづくりを検討する。

・環境ボランティア体制の整備、ツアー化
→環境保全のための活動自体をツアー化し、収益化と環境保全の両立を検討する。こうした仕組みづくりに向けた環境ボランティア体制の整備が必要となる。

戦略 3-4. 地域の文化の保護・継承に向けたデザイン
本戦略は、「戦略 2. 観光消費額増加施策」によって実現する誘客の効果をどの様に歴史や文化の保全につなげていくのかについての戦略となる。前項の戦略 3-1 は観光振興による経済的効果に着目した内容であった。本戦略は、観光振興によって「人が地域に来ることによる効果」に着目した内容となる。

・観光消費額が文化財の保全につながる仕組みづくり
→例えば、三好市の文化財を活用したツアーの代金や、無形の文化財の技術などを利用したお土産品の一部を、文化財保全に使う仕組みが構築できれば、観光消費額の増加と連動して、文化財の保全も進む。こうした仕組みづくりの検討を行う。

・無形文化体験の場づくり
→無形の文化財を観光客が体験できるイベント等を通年企画し、ツアーなどとして販売することによって、無形文化の保全につなげる。

・有形文化財保全ボランティア体制整備、ツアー化
→文化財保全のための活動自体をツアー化し、収益化と文化財保全の両立を検討する。こうした仕組みづくりに向けたボランティア体制の整備が必要となる。

4-3 「計画期間について」

最後に、冒頭に記載した本計画の計画期間について再考する。

本計画の計画期間は、2020 年度から 2024 年度までの 5 年間とする。なお、観光市場を取り巻く環境は刻一刻と変化していくことから、5 年間の各年度に計画の進歩状況を確認しつつ、本計画の内容を適宜見直していくものとする。

これを踏まえ、本計画の実践に向けた実行プラン、本計画を実行する体制と、その進捗状況を管理し検証する体制について、具体化することについて提言し、「三好市観光基本計画」とする。

・三好市観光基本計画実行プラン（2020 年～2024 年度）
・同基本計画実行体制
・同基本計画進捗検証会議（本計画策定委員会を想定）

結びの言葉について

以上、三好市の観光基本計画について検討してきた。本計画では人口減少が進む本市において、観光振興の役割とは一体何かというテーマを深く掘り下げた。単なる観光客の誘客ではなく、何のための誘客なのか、その先に何があるのか。そして人口減少が引き起こしている様々な地域の課題といかに対峙していくのか。本計画はこうした問いに対して、「観光振興」というテーマで答えたものである。その答えは、三好市の観光振興への取り組みは、この地域が継続していくために必要不可欠な施策であるということだ。これは単なる誘客ではなく、交流が生む様々な効果によって地域を活性化・継続していくという宣言である。

世界経済及び観光市場の変化のスピードは凄まじく、数年後先の未来を予見することすら困難である。しかし、市況がどの様に変化しても観光振興による地域振興こそが、三好市にとって最も重要なテーマであることには変わらない。いついかなる状況にあっても、この地域が豊かで在り続けるために、我々は観光振興に取り組んでいく。本計画はその決意表明である。

資料1　計画策定の経過

2018年12月25日（火）	第1回三好市観光基本計画庁内連携会議 1. 人口減少と観光の意義 2. 世界の観光市場・日本の観光市場・国策としての観光 3. 観光をテーマにした政策連携の可能性
2019年 2月 4日（月）	第2回三好市観光基本計画庁内連携会議 1.　三好市観光関連事業者ヒアリングの結果概要 2.　三好市観光振興に向けたビジョン 3.　ビジョン実現に向けた政策間連携の素案
2019年 4月11日（木）	第1回三好市観光基本計画策定委員会 （１）三好市観光基本計画策定事業について （２）三好市観光基本計画骨子（案）について ①世界の観光市場・日本の観光市場の概況について ②各種調査結果をもとにした三好市の観光の現状と課題 ③三好市の観光振興に向けた本計画の位置付けと計画のアウトライン
2019年 5月21日（火）	第2回三好市観光基本計画策定委員会 （１）報告「第１回策定委員会のまとめ」 （２）三好市観光基本計画（素案）について
2019年 6月26日（水）	三好市観光基本計画連携会議（作業部会）まるごと三好観光戦略課 ・三好市観光基本計画（素案）について
2019年 7月30日（火）	第3回三好市観光基本計画庁内連携会議 1.　これまでの進捗状況について 2.　三好市観光基本計画（素案）について
2019年 8月23日（金） ～ 9月21日（土）	パブリックコメントの実施 ・三好市観光基本計画（素案）について
2019年 9月30日（月）	第3回三好市観光基本計画策定委員会 （１）報告「第２回策定委員会及びこれまでの経過まとめ」 （２）三好市観光基本計画（案）について （３）その他
2020年11月29日（金）	三好市議会全員協議会　意見聴取 ・三好市観光基本計画（案）について
2020年 2月10日（月） ～ 2月21日（金）	三好市観光基本計画連携会議（作業部会）まるごと三好観光戦略課 ・三好市観光基本計画（案）について
2020年 3月 4日（月） ～ 3月17日（金）	庁内各課（全職員）　意見収集 ・三好市観光基本計画（案）について
2020年 3月25日（水）	庁議 ・三好市観光基本計画（案）について
2020年 3月25日（水） ～ 3月30日（月）	庁内各課（部長・次長・支所長）　最終意見収集 ・三好市観光基本計画（案）について
2020年 3月31日（火）	策定

資料2　三好市観光基本計画策定委員名簿

（50音）

No	氏　　名	団　体　名(役職)	関係種別	備考
1	植　田　佳　宏	大歩危・祖谷いってみる会（会長）	宿泊施設団体	副委員長
2	大　西　常　夫	JA阿波みよし（代表理事組合長）	農業団体	
3	岡　田　正　子	三好市生活改善グループ連合協議会（会長）	生産団体 女性団体	
4	瀧　川　昌　彦	三好市社会福祉協議会（事務局長）	社会福祉団体	
5	谷　口　晃　司	三好市商工会（会長）	商工・物産 振興団体	
6	谷　口　　宏	三好市観光協会（会長）	観光振興団体	
7	近　泉　裕　久	三　好　市（副市長）	行　政	委員長
8	丸　浦　世　造	阿波池田商工会議所（会頭）	商工・物産 振興団体	
9	丸　岡　　進	一般社団法人そらの郷（事務局長）	観光振興団体	
10	矢　田　博　嗣	徳島県観光協会（理事長）	観光振興団体	
11	山　本　仁　志	四国旅客鉄道株式会社（徳島企画部長）	交通団体	
12	滝　川　恵津子	徳島県西部県民局観光振興部（課長補佐）	行　政	オブザーバー

第２次三好市観光基本計画

発行　三好市役所産業観光部　まるごと三好観光戦略課

〒778-0002
徳島県三好市池田町マチ 2145-1
電話　0883-72-7620
FAX　0883-72-0203
大歩危祖谷ナビ　https://miyoshi-tourism.jp/

三好市
MIYOSHI CITY